

ICU ALUMNI

Vol. I No. 1

WINTER 1958

BY THE FRUITS,
YE SHALL KNOW THEM

President Hachiro Yuasa

Conceived in universal brotherhood, founded by international cooperation and dedicated to the Christian and democratic way of life, International Christian University started in its adventurous career in April 1953 with a core of dedicated faculty and highly selected students, all eager to blaze a new trail for new education for the new world. Abundant blessings were offered by world-minded friends of ICU in Japan, America and elsewhere for this auspicious beginning of this University of Tomorrow.

These young men and women of the Class of 1957 were pioneers. As such, they have willingly accepted handicaps and inadequacies inevitable in an institution in its initial stage of growth. They overcame the handicaps by concerted hardwork and compensated the inadequacies with high hopes for better days to come. The epoch-making first commencement of ICU took place on March 21, 1957 and 171 graduates left the Mitaka campus to take up their respective careers, consciously or unconsciously, to test and to prove the validity and relevancy of the ICU's educational ideal of Service to God and Humanity. These first group of alumni established an enviable record of 100% employment of the widest possible range and varieties, and 100% admission for graduate studies both in Japan and America.

An equally remarkable record of initial achievement was registered by the 124 graduates of the Class of 1958. Together with the members of the Class of 1957, they have established a fine reputation for ICU and placed ICU definitely as a first rate university in the educational map of Japan.

These graduates have founded the Alumni Association of ICU. Their representative now occupies an important post as a Councillor on the ICU's Board of Councillors. All of us are naturally proud of our young alumni. They are the fruits by which ICU will be judged. So far, they have done so well, sometimes even beyond our fondest hope. Yet it is also true that it is entirely too early to predict their ultimate achievement. After all, life is a serious business, so serious that there is no room for easy optimism. And what really counts in the race of life is not the start but the finish.

It is good to learn of the publication of an Alumni Newsletter. May it serve significantly the missions of the Alumni Association: to keep on nurturing the precious fellowship born out of the common and united ideal and purpose of ICU; to encourage, support, comfort, and heal mutually in the hard struggle of life; and to grow, mature, enrich and be enriched, enlighten and be enlightened, and to become truly free as men and women in truth and in spirit.

EDITORIAL

Today is the age of dehumanization. We alumni feel its severity very keenly. The Christmas which we have kept in our hearts of joyful memories of faculty home-gathering or the candle-light service at ICU is now a far nobler dream than the daily pedestrian scene of Christmas that we see around us today; our dreams for our future have faded away before this cruel world's secularism. Of course we had heard of its hardness, but it is apt to stifle our breath by its unexpected impact. The questions of existentialism—for what purpose are we living or why do we exist—have now become realities in our daily lives. However, in the depth of a desperate situation we know the reality of the ideal on which ICU was established—International Fellowship and Christian Gospel. The newness of this ideal, which is completely lost in our age, grips our heart with a most cogent significance. It is not new in the march of time, but it is always "new" because of its real essence. It is, in fact, the only hope and salvation for modern man. The words "the university of tomorrow" have become real in this sense. To re-establish a warm human relationship in our society based on love and faithfulness and to recover the dignity of the human being in history under divine initiative is the only way of saving us from the dreadful nihilism of no purpose, no meaning, and no foundation to life's existence.

ICU Alumni have a great responsibility both to our society in which we are living and for our Alma Mater in which we were brought up. The seed has already been sown. We should expand our fellowship in this dehumanized world. The ground must be cultivated in order that the seed may sprout and bear fruit. And sometimes it might be true that unless a grain of wheat falls into the earth and dies it remains alone; but if it dies, it bears much fruit. And we are responsible not only for present situation, but we should also nurture the young institution which provides the only possibility of building a new world of tomorrow. Demons are furious in their attempts to destroy the vitality of this new bud rooted in truth. We must carefully repulse the attacks of any kind of bacilli, either internal or external, which spoil the dynamic character of life. Both are our tasks. The challenge which we met at ICU has become a reality to us through our daily experiences. We are called upon to make every effort to achieve these goals.

The kingdom of heaven is like a grain of mustard seed which a man took and sowed in his field; it is the smallest of all seeds, but when it has grown it is the greatest of shrubs and becomes a tree, so birds make nests in its branches.
Matt. 13: 31, 32.
December 20, 1958

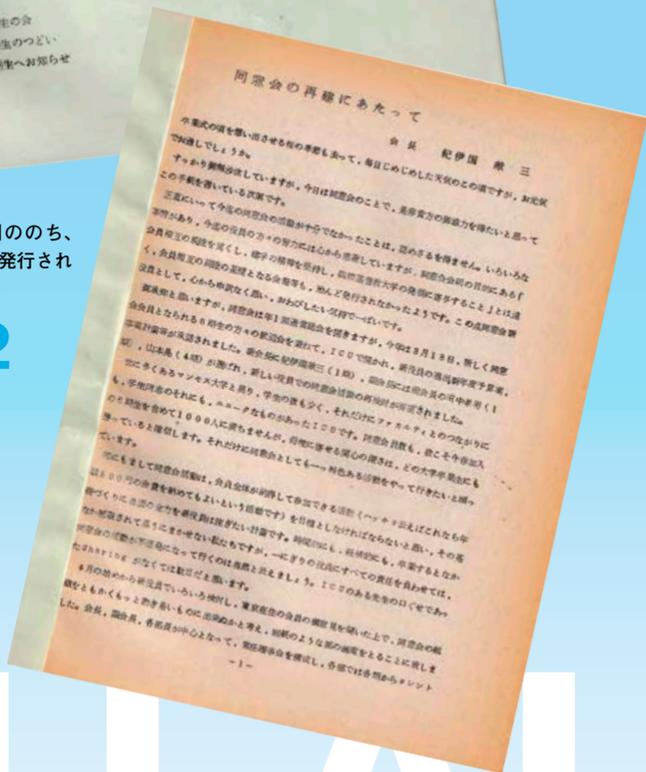


3年の空白期間ののち、内容を一新して発行された新たな第1号

1962

1958

アラムナイニュースのまさに源流。「マタイによる福音書」の有名な一節が見える



特集

アラムナイニュースの歩みを辿る

大学の同窓会報は時代とともにその姿も内容も変遷を遂げてきた。キャンパスのアラムナイハウスと大学図書館内のICUアーカイブズに行けば、過去の会報を閲覧できる。そこには、献学からの大学の歩み、同窓会運営の苦勞、大学を揺るがした時代の流れ、同窓生の意識に反映された社会の変化などが見てとれる。

文：新村敏雄（本誌）・福本高宏（本誌）・岡本有起（同窓会事務局）
写真：福本高宏・岡本有起

初めての同窓会報が発行されたのは1958年の冬、クリスマスを目前に控えた頃のことだ。前年に卒業した第1期生、その年に卒業した第2期生らによって組織された同窓会によるこの刊行物は、湯浅八郎初代学長のメッセージ、同窓生からの寄稿、そして同窓会の設立過程や選出された役員名などを報告する記事から成る。A5判4面で文章はすべて英語。翌年にも同様の体裁で発行されている。

その後、少し期間を空けて、形式や内容を異にする会報が1962年に冊子体で登場する。新たな第1号の巻頭記事は「同窓会の再建にあたって」。新

会長による「正直にいて今迄の同窓会の活動が十分でなかったことは、認めざるを得ません。（中略）同窓会会則の目的にある『会員相互の親睦を篤くし、建学の精神を堅持し、国際基督教大学の発展に寄与すること』とは遠く、会員相互の親睦の基礎となる会報等も、殆んど発行されなかったようです」という文章からは、創成期の混乱と苦勞が窺える。

以降「募金募集のための“バザー”ひらく」（1962年10月）「同窓会主催歌舞伎観劇会」（1963年3月）「同窓会運営軌道に まず組織づくりに全力」（1965年6月）などがトップ記事

に並ぶ。先人たちが同窓会を形にするために、試行錯誤しながらさまざまな試みを行っていたことがよくわかる。

大学紛争を反映した時期も

こののち時代を反映し、会報の記事内容が一変することになる。大学紛争だ。「鉄柵と検問所、戒厳令下の授業再開」（1967年9月）「六・一四反戦デモ行われる 教職員・学生四百人が参加」（1968年8月）「座談会 大学はいかに再建されたか 在校生に聞く」（1969年1月）「能研処分白紙撤回へ！ 再び火を吹いた能研斗争、大衆団交で三項目要求を貫徹」（同4月）、

そしてそれらを総括する形で同年12月に「ICUの現況を考える ICU問題をめぐる特別レポート」が発行されると、この一連の流れに終止符が打たれた。

第1期生で同窓会活動にも理解の深い金澤正剛名誉教授は、この頃について「卒業した翌年に渡米したため同窓会ができたことを知ったのは随分と後のことだったが、ちょうど紛争時代だったため、会報を受け取ったのも8年後の帰国後すぐではなくさらに後のことで、それがいつのことであったかも覚えていない」と回想する。

1975

将来基金確保と自然保護を目的に都に売却したICUゴルフ場は「ラヴァーズ・レイン」として数多くのカップルを生んだとか



ICUの現況を考える

—ICU問題をめぐる特別レポート—

1969. 12. 10 発行 同窓会 広報部 責任編集

あのヘイで囲まれ、連日の学生たちのデモ隊と学内に常駐する機動隊の衝突や流血のなかでICUはかつてない異常な事態のまま六十九年の終りを迎えるようとしております。機動隊に守られた授業再開に抗議し、それを拒否して登録しなかった学生は三分の一を越え、大学当局は学則の規定をたてにしてその未登録学生の学籍（学籍）からの抹除」という措置に動きかけていると新聞報道も伝えられて、父兄たちのなかにも「未登録学生を守る」とか「会合が持たれるなど、ICUのかかえる矛盾と問題にますます深刻化しようとしております。私たちが同窓会広報委員会では、新聞、テレビ、週刊誌などで伝えられている現在のICUの状況をより詳細に同窓生の諸見解に知らせ、学生たちの主張や大学当局者の立場などを検討していただく材料として、ここに十一月末日の時点でICUについての特別レポートを企画しました。

目次	
1. 三宅学長事務取扱会見記	d. 父兄はこう考える — 林雄次郎
2. 「パワーポリティクスを断せ」 三宅執行部との会見を終えて	4. 同窓生はこう見る
3. 「問題の本質を考えよう」 — 関係者の声 —	a. 外から見たICU問題
a. ICU全共闘の立場	b. 同窓生教職員が見た問題点
b. 学生の主張	5. 現況報告
c. 橋中教師の声 — 田川雄三	ICU教授会結成のお知らせ
	編集後記

1969

この号で大学紛争関連の記事にはひと区切りが付き、その後はほほ姿を消す

1981

湯浅初代学長についての記事はしばしば見られ、敬愛されていたことがよくわかる



ALUMNI NEWS

同窓会らしさある内容に

1970年秋からタイトルがTHE ICU ALUMNIになり、判型や内容も大きく変わった。「同窓会ホーム・カミング パイプ・オルガン演奏会」(1971年春)「3月7日ホーム・カミング 参加者300名余 盛況でした」(同夏)「6月11日 ホーム・カミング“みどりかがやくむさしの”へぜひ」(1972年春)「総会・ホームカミング報告」(1972年秋)「第17期卒業生、教養学部219人、大学院23人を送る卒業式は、3月21日におこなわれました」(1973年春)と、和やかな雰囲気の特集が並ぶ。

この頃からは体裁も内容も概ね安定し、特集やトップ記事にも「総会」「役員改選」「同窓会組織」「会員名簿」「賀詞交換会」といった活動報告についての言葉が多く並ぶようになる。時には「サヨナラ・ゴルフコンペ 三月でゴルフ場閉鎖 同窓会がコンペを主催」(1975年2月)などICUならではの記事もあるほか、資金集めにも尽力

していた様子で「第2回グランドバザー 一品ぞろえに万全期す 福引券で豪華景品当てよう」(1976年3月)「同窓会基金充実にご協力を 現在高四百六十万円 低金利時代に増額困難」(1978年12月)といった記事も見える。1985年9月発行号でICU ALUMNIとなり、基本コンセプトはそのままに、記事のバリエーションが豊富になっていく。宇宙飛行士の秋山豊寛さん(10)、直木賞作家の高村薫さん(20 ID76)はじめICU出身の著名人が誌面に取り上げられる機会も増加。1997年8月発行の87号からはオールカラーになり、見やすさも増した。

スタイルが大きな変貌遂げる

大学創立50周年を間近に控えた頃、同窓会報にも大きな転機が訪れる。最初の動きが1999年4月発行のAlumni News 92号だ。タイトルやロゴが変わったうえ、それまでの新聞型からA4の冊子体16ページと形態も大きく変貌を遂げた。92号「明日のICUを考える 新たな50年に向けて」を皮切

りに「アラムナイハウスオープン記念号 同窓会活動の拠点 会員の憩いと交流の場に」(2001年4月)「同窓会会長がICUの理事に 大学との関係に新次元」(2001年10月)など、この形態では合計7号が発行された。

さらなる変化が2002年10月に起こる。この号から現在のタブロイド判になり、ビジュアルにさらに力を入れるようになる。この一連の大きな広報変革について、1998年から2002年まで同窓会会長を務めた石塚雅彦さん(7)はこう振り返る。「この頃は同窓会にとって広報というものの存在感あるいは重要性の認識が希薄だったように記憶している。従前の会報は数ページの地味なものだった。インターネットが普及し始めた頃だったが、デジタル世界というにはほど遠い時代。同窓会がWEBサイトを持ち、オンラインで活発な広報活動をするようになったのもずっと後になってから。そんな中、当時の同窓会の広報活動にとって革命的だったのは、今のように大判でビジュアル重視のALUMNI NEWSが始

まったことだった」。この証言からも、2000年前後が同窓会にとってひとつの広報革命の時代であったことが見て取れる。以降、記事の内容には変化があるものの、この形で現在に至る。

ひとくちに同窓会報といっても、時代とともに多くの変遷を経てきたアラムナイニュース。同窓会が事務局を大学に委託するなど在り方を変えて1年が経とうとしているいま、同窓会報の在り方もまた転換点にきているのかもしれない。だが時代とともにその形態や内容は変わろうとも、大学と同窓生を結び、同窓生同士をつなぐかけがえのないメディアであることは疑いない。

最後に金澤先生から寄せられたメッセージを掲載し、本項を閉じたいと思う。「献学70年というICUにとって、会報が果たす役割は重要だと思う。一期生の私にとっては、最近のICUの動向を理解するのに欠かせない情報を送ってくれる。一方、過去の歴史を最近の学生などに伝える重要な情報源であると思う。今後も大いに期待して止まない」

ICU ALUMNI NEWS

Special Interview

2000年前後、「アラムナイニュース」の大きな転換期に編集長を務めた森宗秀敏さん(32 ID88)、加藤陽之さん(31 ID87)、そして現在本誌のアートディレクションを担当する佐野久美子さん(44 ID00)に取材させていただいた。



森宗秀敏さん
(32 ID88)

MORIMUNE, Hidetoshi

91号(1998年12月)～94号(2000年4月)編集長。同窓会では大学担当、広報担当など多岐にわたって活躍。株式会社電通コーポレートワン執行役員。現在ICUの理事も務める。

学生のころから同窓会に携わってきた森宗さん。社会人になっても積極的に同窓会活動に取り組んできた。当時は「仕事」「同窓会」「教会」「プライベート」を生活の4本柱としコミットしていたので、忙しさはまったく苦にならなかったそうだ。

森宗さんのときに新聞型から16ページの冊子版に変更した最大の理由は、作り手の「手間暇」をできるだけ軽減するためだったという。「レイアウトに合わせ行数を細かく調整したり、写真をはめ込む位置に苦心したりと、慣れていない人にとっては結構な負担になっていた。校正作業も物理的に集まってやる以外に選択肢がなかった」

変えることを可能にしたのが、急速なパソコンの普及。現在のように、編集作業に役立つさまざまなソフトやアプリが簡単に使える時代ではなかったとはいえ、大幅に作業を効率化できた。「入稿や校正もメールでできるようになったし、レイアウトや文字数についても、以前ほど制約はなくなった」。リニューアルによる情報量の増加で制作作業がより大変になったかと思いきや、実は効率化が図れスタッフの負担が軽減。制作上の敷居が低くなったことで、編集部に参加したいという人も増えたということだ。

内容面では何をおいても大学創立50周年にフォーカスを当てた。森宗さん自身が委員長を務め推進してきた「ICU Vision 2050委員会」の活動を通じまとめた大学への提言

「Innovation 2050」。「50周年時に次の50年を考える。大規模なアンケート調査をかけ、それを踏まえ、さまざまな企画、学生たちの知恵や知識の獲得に繋がるようなアクションを同窓会から提案しよう」という企図から生まれた、数多くのイベントやプログラムの紹介や報告が誌面に踊る。

「今後アラムナイニュースに期待することは？」の問いには、「大抵の人は卒業すると、どうしてもICUとの接点が減ってしまう。多くの場合、自分からはなかなか情報を取りに行かないので、定期的に媒体が届いて現在のICUや同窓生について情報が得られるのはとても貴重なこと。特別な理由がないと大学を訪ねたりしないから、ニュースを通じてホームカミングやリユニオンなどを、どんどん呼びかけてい

く。それもただ集まるだけでなく、現役学生と交流できるなどの仕掛けを作るなどは望まれていると思う。それからキャンパスの変化を伝えることも重要。「ICU三鷹キャンパスの森」が環境省の主導する「自然共生サイト」の認定を受けたこと。「トロイヤー記念アーツ・サイエンス館(T館)」という新しいリベラルアーツの学び場ができたこと。あるいはかつて教室の扉は外開きだったのが現在は内開きになって、その結果廊下がきれいになったこと…などなど、昔から今にいたるタイムラインやストーリーがあると、卒業生にとっても自分ごとになって熱心に読むのでは。自分の子や孫を将来ICUに入りたいと思う人も、さらに増えるかも」との回答。森宗さんのICUや同窓会についての思いは限りなく熱く深い。



大学創立50周年記念特集号のこの第92号で大幅リニューアル。右の誌面にある「ビジネスコンボケーション」は森宗さん自身の企画

How to Graduate from ICU in Good Health

佃隆の「Chiropractic U」第3話

ICUに入学したのはよいものの、体調に難がある学生さんがICUを健康的に卒業するには多くの工夫が必要であることを、日々の臨床で感じております。こんにちは、私は2000年にICUを卒業し、三鷹でカイロプラクティック院を開き、これまでに数百名のICU現役学生さんの健康サポートをしてきております。

ICUの卒業、学士取得には累計130単位(卒業研究含む)が基本で、日本の大学では単位は「1単位=標準45時間の学修(授業+予習復習)」を前提に科目設計されています。ただ、一般的ICU生の予習復習にかかる集中度があまりにも密で、学問的好奇心がある場合は最低要件の単位を大幅に超えて履修することも多いです。続いて、ICU生の図書館利用は国内でも活発で学生1人あたり年間貸出32冊(電子書籍は含まず)という数字は卒業生の一人としても誇らしい一方、貸出書籍に加えて指定教科書、どの授業でも必須となったノートPCと一緒に持つと一般ビジネスパーソンのバッグよりも重くなります。

そもそも、体重の10～15%を超える荷重は姿勢を悪化させ、腰や肩への痛みのリスクが高まります。体調に不安がある場合は10%以内を目安に、当日の学修で使う章だけを携行したり、キャリーケースを使い、学内ロッカーを使用することをお勧めします。ICUには1年間1,000円で借りることのできるロッカーが、学食2階とD館内に多数用意されており、空きがあります。ただ学生さんの感覚からすると、頑張ればこれぐらいの荷物を持てる、1,000円先払いすることに抵抗があるようです。地方から親御さんがカウンセリングに付き添われて当院までいらして、そこでようやくロッカーの存在を知るというケースも多々ありますので、付記しておきます。

親御さんによる睡眠や栄養のサポートに加え、体への物理的負担を軽減させてあげることで質を落とさず体も守る。このバランス設計こそ、知的好奇心に満ち溢れたお子様の学びの満足度を維持しつつ、健康的にICUを卒業する近道です。今回の情報がICUを健康的に卒業するための一助になりましたら幸いです。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

ICU卒業生の佃隆(2000年卒)とパートナーの佃美香が1993年より運営しており、毎年1万人以上の方が通院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院では、姿勢のゆがみと症状の関連性を見極めるカイロプラクティック検査を行い、症状の原因を特定し症状を改善していきます。お気軽に来院ください。

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。

tel 0800-888-4270
web http://mitaka-chiro.com

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平瀬ビル301号室





加藤陽之さん (31 ID87)
KATO, Haruyuki

99号(2002年10月)～102号(2004年5月) 編集長。50周年記念企画のオープン・レクチャー「リベラル・アーツを通して」での講演がきっかけで編集長を頼まれることに。カルチャー雑誌「STUDIO VOICE」元編集長。

編集長就任以前は同窓会活動に参加しておらず理解も薄かったので、自分でよいのかとも思ったそうだが、その時の自身のポリシーを「風が来たら乗る、頼まれたら断らない」としていたことと、ある種、外部目線だからこそ見えてくることもあるだろうという考えから、重責を引き受けることにした

という。

2002年当時、同窓会には活動自体が活性化していない、特に若い世代の関心が低いという問題意識があった。加藤さんは若い世代が手に取りやすいようにと判型を大きくタブロイド判とし、写真やデザインなどビジュアル面を強調した誌面に変える、大幅なリニューアルに着手する。

方向性としては「ICUは目的を明確に大学名に記していることが特長なので、『インターナショナル』『キリスト教』『リベラルアーツ』の3つを基本テーマに据えた。また『親子ともICU』というケースが見られるようになってきた時期なので、世代を超えて共有・対話できる内容を意識した。さらに当時はアメリカでダイバーシティが言われ始めた頃で、ICUは学生数は少ないけれど多様性に富んでいることから、できるだけ多くの領域で人物をピックアップして、その活躍や横顔をインタビューでまとめるという企画も取り入れた」と、インパクトのあるビ

ジュアルの背後には、綿密に練り上げられたコンセプトが横たわっていたことがわかる。「ノスタルジー」「メランコリー」も重要なキーワードで、「過去の重さと未来の約束という2つの側面を共存させる。懐かしさを感じさせながらも未来志向でいく。言わば過去と未来を現在に収斂させるという、そういった点も大切にしたい」とのことだ。

「印象深い記事は？」と聞くと「マスメディアに登場する有名人ですら気軽に取材に応じてくれて、時には自宅に招き入れてくれたりもした。こんなことは普通の取材ではあまりない。皆ICUのことが本当に好きなんだと実感した。なので個々の記事というよりも、取材相手とともに過ごした時間のほうが記憶に残っている」との回答が。「メディアは広場であるべき」と考える加藤さんにとって、まさしくそれは広場で過ごすような和やかな時間だったのだろう。

「このフォーマットになって四半世紀も経つので、さすがに長いしそろそ

ろ変えてよとも思うが、他方これほど続いたということは、「器」は間違っていなかったのかな」と笑う加藤さんだが、今後のアラムナイニュースについては「昨年同窓会の運営を大学に業務委託することになった。大学と一緒にやっていく部分と、同窓会として確固たるものを維持していく部分と、しっかり考える必要はあると思う。同窓会の在り方とともに、広報誌の役割も自ずと決まってくるのでは」と、真剣な表情を見せた。

当時の編集部には卒業生で大手出版社に勤務するプロの編集者もいれば、現役ICU生の記者も数人いた。「同窓会やボランティアでは全員が平等であるべき、組織もフラットであるべきだ」ということが、自分自身で決めた約束事だったのにも関わらず、いざ編集作業に入ると大人げなく学生を怒鳴りつけたり……。あの時は本当に申し訳ありませんでした。いろいろとすみませんでした。なお、学生編集部員はその後、新聞社、通信社、出版社、映画会社に就職したり、自分でPR会社を立ち上げたりと、メディア関係者を多数輩出。「ささやかながらお手伝いできたかも」。濃密で信頼感に溢れた人間関係であったようだ。



左：それまであまり語られてこなかった「キャンパスの自然」について、いち早く着目(第100号/2003年5月)

右：世代を超えたメディアであることを象徴する記事のひとつで、人気を博した(第102号/2004年5月)

佐野久美子さん (44 ID00)
SANO, Kumiko

118号(2012年11月)～現在、アートディレクター。大学では美術史を専攻、卒業後に入社したデザイン事務所の先輩がICU出身でアラムナイニュースを担当していたことから、本誌に関わることに。

佐野さんとアラムナイニュースとの出会いは独特だ。デザイン事務所の先輩の山口晴子さん(40 ID96)が当時のアートディレクターだったが、商業誌でもないのにビジュアルがあまりにカッコよかったため「手伝いたい」と申し出たのが始まりで、その結果単なる手伝いではなく、アートディレクター自体を118号から引き継ぐことになった。以来、アラムナイニュースのビジュアルを一身に背負っている。

携わる以前は同窓会活動には参加しておらず、周囲にもICU出身者は少なかったという佐野さんだが、本誌を通じ数多くの素晴らしい出会いがあったという。「編集者とともに卒業生の取材に同行したり、ICU出身のカメラマンやアーティストとともにページを作ったりと、アラムナイニュースを通じ

て一流のプロフェッショナルとクオリティの高い仕事ができる満足感は格別だった」

学生のときは交流がなくとも、「ID00の同期がこんな活躍をしている」「え、この人ICUだったんだ」という発見や驚きも、この仕事を通じて何度も経験した。さまざまな人たちとアラムナイニュースを通じてつながる。同窓会報でなければ考えられないことだ。

佐野さんにとってアラムナイニュースの最大の魅力は「卒業生で作っている良さ」。スタッフも取材相手も読者もみんな同窓生なので、本誌のビジュアルには、他のデザインの仕事にはない特別なこだわりを持っているようだ。「建物や景色など、ICUの風景をたくさん入れたい。そして『懐かしさ』と『いま』とをバランスよく埋め込みたい」。目下の悩みは、誌面に「いま」の部分がやや減ってしまっていること。「以前は大学の近くに住んでいたのだから、自分でもよくキャンパスに写真を撮りに行っていた。風景以外でも、現役の学生が登場するなどして、ICUの『い



ま』を表現できた。そういうのもっと盛り込んでいければ」と佐野さんは語る。

最後に、今後アラムナイニュースがどうあって欲しいかを聞いた。「同窓会という広いネットワークがあるんだということを、アラムナイニュースを通じて自分は知った。『卒業生』『同窓生』というワードで思いもよらずつな

がったり話ができたりする、そういうことがいつまでも続くといい。同窓生には年代が違ってそれを越える何かがあるので、ある意味、内輪ノリっぽいところもあるかも知れないが、そういうメディアでいつまでもあり続けて欲しいと思う」。これからも佐野さんはビジュアルの力で、昔といま、人と人をつないでいく。

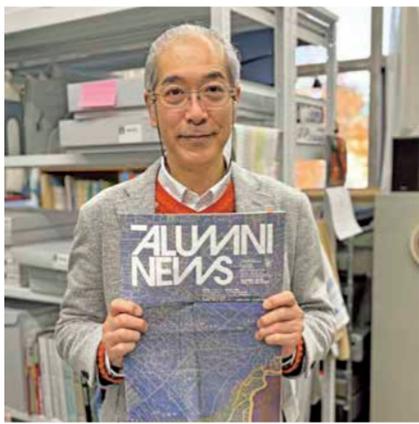
アラムナイニュースの歴史

1958／冬	最初の同窓会報「ICU ALUMNI」発行 翌年春、同形態で2号目を発行
1962／夏	冊子体の「ICU同窓会報」として新たに第1号発行 この形態で1963年9月まで半年に1度のペース（No.1-No.4）で発刊
1965／6	国際基督教大学同窓会会報 タブロイド新聞サイズで。この形態では数号を発刊か。資料が少なく、この時期の発行サイクルはよくわかっていない（右ページ1,2）
1967／6	国際基督教大学同窓会会報 冊子体にリニューアル 1969年4月まで年2回のペース。学生運動に関連した記事が続く。1969年12月には特別版「ICU問題をめぐる特別レポート」が発行され、この問題については終止符を打つ。この頃は通巻ナンバーが記されていないため、アラムナイニュースの通巻ナンバーと実際の発行回数は一致しない（3）
1970／秋	THE ICU ALUMNI 折りたたみ式の新聞形態。以降サイズや形態を変えながら1985年5月までこのタイトルで発行を続ける（4,5,6,7）
1985／9	ICU ALUMNI ロゴ変更 6面に。以降、基本的に年3回のペースで発行 1997年8月の87号からはカラーに（8,9）
1999／4	ALUMNI NEWS A4冊子体16 ページ。この形態では年2回、7号を発行
2002／10	ALUMNI NEWS 年2回の刊行はそのままタブロイド判に。若い世代の関心を高め、同窓会活動の活性化を図る狙いで、ビジュアルを強調した誌面づくりにリニューアル。現在に至る（10）



進むアーカイブズ化

ICUアーカイブズでは数々の文書のアーカイブズ化が進んでいる。担当の松山龍彦さん(32 ID88)に現在の状況を伺った。



松山龍彦さん(32 ID88)
MATSUYAMA, Tatsuhiko

ICUには1992年に図書館員として入職。大学の別部門を挟みながらのべ26年間、図書館勤務。2020年からICUアーカイブズを担当、ICUの資料全般のアーカイブズ化を進めている。松山さんは本誌「From the University」欄で133号から7号に渡り連載記事を執筆

ICUアーカイブズには膨大な量の資料が届けられる。いわゆる行政文書から一通の手紙、プリントまでが整理の対象だ。松山さんは段ボールを一箱一箱開け、仕分けし、その中から残すものと捨てるものを峻別する。

峻別の際には、まさに経験と勘がものを言うそうだ。将来、利用者から「このような資料はないか」と聞かれるものはどれか。これは後々必要になるんじゃないか。これは取っておいても仕方がないのではないか。何がICU

にとって必要で、何が不要か。長年の経験から勘や判断力が養われていく。

ICUアーカイブズの基本的なデジタル化方針として、優先するのは主に3つ。まずは大変貴重なもの。例えばICUが最初に大学設置が認められた時の設置認可証など。2つめは、物として劣化していて、物理的に失われてしまう可能性があるもの。3つめは写真など、グラフィカルなもの。「アラムナイニュースは2つめの範疇。とりわけ古いものは、製本するには紙の質的に難しいし、サイズもまちまちなので、それについては現物は現物のまま保管し、スキャンしてデジタル化したデータを作ることで保存していく方針を取っている。電子化したら見たいという引き合いは高いのではないか」

2026年春には初号から製本できていないところまで、すべてPDF化する予定。当面は製本版も電子版も、見るためには図書館に足を運ぶ必要があるが、「何年にこういうことがあったのだけど、そのときの記事はないか」といった程度の、簡単な質問や要望であれば、添付ファイルで送るような個別対応も場合によっては可能とのことだ。



ICUアーカイブズ執務室内の書棚には公式文書からチラシに至るまで資料がぎっしり



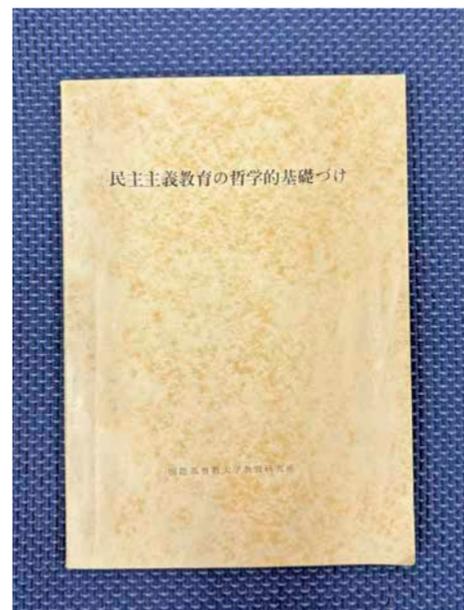
31号(1980年4月)から製本化され、ICUアーカイブズで保管している

求む! バックナンバー

6号、9号(いずれも1966年発行とされる)、47号(1984年発行)、75号(1993年発行)は同窓会事務局でもICUアーカイブズでも保有しておりません。お持ちの方はぜひメールにて事務局までご連絡ください。

ご感想をお聞かせ下さい

ぜひ特集ページをはじめ本誌のご感想をお聞かせ下さい。また他に、企画や人物の紹介などがある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。
事務局メールアドレス：
icualumni.office@icu.ac.jp



ICUの大学院の教育研究所で1959年にまとめられた、ICUアーカイブズに保管されている一冊。民主主義・人権主義について戦後の新生日本はかくあるべきというICUの原点ともいえるような思想が、大きな熱量とともに学術的に展開されている

シン・同窓会支部を紹介!

同窓会には、国内や海外の各地域や、部活やサークル、寮などごとに活動をする「支部」がある。近年は共通の興味・関心や職業などを軸に活動をする支部も少なからず誕生し、活動は熱を帯びている。今回は新たに誕生した2つの支部にフォーカスを当て、同窓会の支部活動の今を探った。

文：滝沢貴大(本誌) 写真：各支部提供

2025年4月19日 タケノコ掘りツアー



2025年7月26日 建物ツアー



2025年11月1日 住宅ツアー

建築・環境支部

支部長：浅野雄太さん (45 ID01)
部員：岸 佑さん (47 ID03)



(左から)
岸 佑さん
浅野雄太さん

支部設立の経緯

浅野：2024年のICU祭で、ICUキャンパス内の教員住宅をテーマにしたワークショップを開きました。教員住宅はヴォーリス、レイモンドがそれぞれ手がけたもので、現在は耐震性の問題などで空き家になっています。どう継続して保存するかや今後の活用について考えていければ良いよね、という意見が参加者の中から出たのが、直接的きっかけになりました。

ワークショップ自体はICU高校出身で現在は日建建設で設計業務に関わっている大和田卓さん（ICU高校卒）が主催したもので、その経緯は岸さんが説明されます。

岸：元々は、東京理科大工学部の伊藤裕久先生の研究課題が国分寺崖線で、ICUのキャンパスもちょうどそこにあって住宅が建っているの、調査をさせてほしいという連絡があったことでした。

教員住宅研究会を作って、学術的な研究をはじめたんですが、実際に始めると日本国内でも非常に珍しい建物が残っていて、そこに誰も住んでいないことが浮き彫りになりました。空き家の問題は全国的にも言われていますが、住まないと建物はどんどん朽ちてしまう。これだけ建築史的にも重要な建物がキャンパスに残っているのに、誰も気にしていない状況だったので、同窓生も含めて声をかけようということでワークショップを開きました。

お二人のバックグラウンド

浅野：私はID01で、卒業後に工学院大の建築学科に学士編入をして、いまは建築設計事務所に勤めて建築設計の業務に一級建築士としてあたっています。

10年くらい前にキャンパス・グラウンド・デザインの話が持ち上がって、寮の建て替えなどが続いた時期に声をかけられて評議員になって、同窓会活動にかかわるようになりました。今後のキャンパスの建物をどうするかという議論の中で、本館建て替えの話も出てきて、今に至る活動に加わりました。

岸：私はID03で、大学院もICUで歴史を専攻していました。専門は建築史で、10年ほど前にD館について話すシンポジウムを開いたりする過程で浅野さんや伊藤先生とも知り合いました。建築を勉強している人たちにとっては、ICUの中で木造住宅があることは知られていますが、キャンパス内で入れなかったり先生が住んでいたため調査の突破口がありませんでした。

キャンパス・グラウンド・デザインの議論の中では、旧来の教員住宅を取り壊すという話もあり、それであれば調査をさせてほしいということで、2018年ごろから始めることになりました。ただ、学術発表はしてきましたが、研究の外の人たちへの広がりはありませんでした。そこで、ワークショップを開くことになったんです。

支部の活動の意義

浅野：建築を学ぶ学生が必ず読む設計資料集にも、レイモンドが作ったICU

図書館が載っています。岸君たちの尽力のおかげでD館がさまざまな賞を取りましたが、建築の視点からすると、本館も含めてICUの建物は学術的な価値があります。それを、何とか発信していけたらと思っています。

現在支部にいる10人ほどは、2024年12月の教員住宅のワークショップに参加した人たち。うち一人は、教員住宅にお住まいだった鈴木喜子さん（56 ID12）です。ロシア建築が専門の池田雅史さんもいます。

キャンパス内の環境に関心のある人も多く、であれば建築と一緒に環境も語りましょうと、環境の名もつけました。24年の4月にタケノコを掘るイベントを旧・教員住宅の区画一角を借りて開きました。これは毎年やりましょうという話になっています。その後、夏に本館のリニューアルが終わったあと、岸君の解説で有志でキャンパスを歩くこともしました。その間、メンバーも数人増えました。

あとは、今年2月ごろにアラムナイハウスで対面のイベントを開く話もしています。本館が登録有形文化財になったので、そのお祝いとして、ICUの建物がどういう位置づけで見られていて、どういう価値があるのか、学術的な観点も踏まえつつ考える場にはたいです。

また、学術的以外の価値も、同窓生として共有したいという思いを持っています。建物がなくなると、建物をきっかけにした「場」がなくなってしまうこともあります。たとえば、第2男子寮がなくなりましたが、建物があるからこそキャンパスに戻って

きたり、代を超えたつながりがありました。大学の建物は同窓生のいろんな連帯、つながりにも必要だと考えているので、そういうことにも協力していけたら。

岸：具体的な展望としては、空き家になっている教員住宅をどう活用していくのか、同窓生の立場として大学に提案していきたいと考えています。

今後の展望

岸：ICUの建物についてひとまず絞ってはいますが、単純に建物が好きという人も同窓生には多いと思うので、そういう人たちともつながれたらと思っています。なかなか横のつながりも生まれにくいので、この支部がアピールになればいいと考えています。

ICU内の建築をどうするか、5年10年経てば状況は変わるかも知れない。そういうときに動けるインフラとして続けられたらうれしいです。

浅野：支部を作ったことで、今まで語りたくても語る場がなかった話が進んでいってくれるんじゃないかと思っています。建物の話は息の長い話になるので、仲間を増やしてずっとずっと続けていける活動にしていければ幸いです。

今はキャンパス内の建物整備は大きい話が一段落して、これから使い続けるフェーズになりますが、そうすると建物への愛着が薄れていく可能性があります。そういうときに、建物って色んな意味があるんだよと、継承していけるような活動になればうれしいです。



2025年4月19日にICUのキャンパスで開いたDIPSと国連の会支部共催のイベント

国連の会支部

支部長：大竹日和奈さん (68 ID24)
部員：森田宏子さん (21 ID77)
部員：池上慶徳さん (68 ID24)



(左から)
大竹日和奈さん、
森田宏子さん、
池上慶徳さん

会設立の経緯

大竹：ICU国連の会支部は、国際機関の職員になりたい学生や卒業生、現役で働いている方々、国際機関の卒業生が集うネットワークとして2024年に発足しました。

元々ICUには外交・国際公務員養成プログラム(DIPS)というものがあり、この支部と同じような機能を果たしていました。それが2025年度に終わってしまうことになり、そのスピリット、蓄積してきたものをなくさないためにも、どうやって残せるのかを森田宏子先生(元国連職員で、プログラムのアドバイザー)を始め、DIPSに携わってきた先生方が考えてくださいました。

私自身国際機関を目指していることもあって、設立しました。

当初は70人くらいでしたが、現在は100人くらいが登録しています。現役学生もヘルプに入っています。私自身まだ国際公務員や国連職員ではないですが、それを目指している人も、現在国連機関で働いている人も、自分の経験を若者に伝えたいという卒業生も参加をしています。

代表になった経緯

大竹：会が設立されたのは2024年の10月。私が7月に大学を卒業した直後のタイミングでした。私は現在、外資系監査法人でビジネスリスクコンサルタントの仕事をしていますが、国際公務員をまだ目指しているので、同時並行で大学院を目指していて、近々イギリスの大学院で開発学と教育学の研究をする予定です。

自分自身DIPSが提供してくださった国連研修に参加したし、教授の皆さんとよくお話をさせていただきました。国際公務員を目指す若者として、さまざまな世代をつなぐ役割を任せられたと感じています。

森田先生、池上さんのお話

森田：DIPSが立ち上がったのが2019年で、当初から関わってきました。国連研修や講義、インターンシップや人事関係のワークショップなど需要にあわせてやってきました。

DIPSは委員会運営し、元国連大使の吉川元偉先生をはじめ、同じく元国連職員のサルトン先生や、国際関係・SDGsなどのご専門の毛利先生、国際経済専門の海蔵寺先生などにも関わっていただいていた。

国連研修は2020年に初めてニューヨークの国連本部で行う計画でしたがコロナのためにキャンセルに。その後21年から25年まで毎年春休みに1週間の集中講義として行ってきました。キャンパスでハイブリッド式に世界中の国連職員をZoomでつなげ、また対日国連事務所や外務省・JICAの代表からお話をいただき、学生同士で協力して報告書を作成しました。

25年春にはJICUFの支援を得て初めて様々な国連機関が南太平洋地域事務所を構えるフィジーで開催。それらと地域機構や政府機関を訪問しました。また、毎年冬学期には「国連と持続可能な開発」という授業を行い、実際に国連職員の多くが経験する課題を扱いました。

私は国連機関で35年ほど働いて、ICU卒の先輩や同期ともつきあってきたからこそDIPSを作った経緯があります。プログラムがなくなり、それを目指して入学してきたという学生の受け皿として、支部を立ち上げる運びになりました。

25年の1月には国連80周年、SGDsと絡めてシンポジウムを開きました。ICUの先生方や、学生、同窓生のパネリストに加えて、国連からゲストスピーカーもお呼びすることができました。秋には学生と同窓生をつなぐユースシンポジウムも開催。そういうイベ

ント、ワークショップは、年に2、3回開ければと思っています。

池上：ポジショニングについて言うと、この会は大竹さん、森田先生を中心に動いているのですが、大竹さんが卒業されたので、学生側のコアメンバーとして、お声がけいただきました。

私は現在ICUの大学院在学中で、博士課程にも進む予定です。会を運営する上で必要な現役学生のリクルートなどを担っています。

メンバー構成と現在の取り組み

大竹：約100人のメンバーのうち約25人が現役の国際公務員、15人が国際機関の卒業生、25人ほどが卒業生だけどもまだ国際公務員になっていない人、残りが現役学生です。

基本的には、イベントなどを通して同窓生をつなぐことに取り組んでいますが、これからは、キャリアサポートオフィスとも一緒になって、国際公務員のキャリアを目指す方々を現役職員や卒業生ともしっかりつなげられたらと思っています。

森田：分野別の取り組みもできるのでは、と考えています。法律に絞って、ハーグの国際司法裁判所の関係者にお声がけしたり、教育分野を目指している人も多いので、たとえばユニセフにいる同窓生などを招いたイベントを開けたらと思います。

DIPSのプログラムが終わることで、なくなる授業もありますが、学術的というより、ネットワークを広げられればとも思っています。国際公務員向けの履歴書の書き方や面接対策、そもそもどこで情報を得られるか、などを提供できる場にもしていきたいです。

大竹：国連職員になるには修士号と2年以上の職務経験が必要で、その間のサポートがないと、熱意はあっても道が見えなくて諦める方も出てくる。自分も周囲と一緒に目指していた人がいなくなり、寂しい思いもしました。

ICUの卒業生にはこんなにも広いネットワークがあるので、そのつながりができたら。

今後の目標

大竹：今後の展望としては、イベントをきちんと全うして、サクセスフルなものになるようにしたいです。あとは、支部の目的でもあるキャリアサポートも手厚くできるようにしたい。ニュースレターなどの宣伝にも力をいれていきたいです。

2026年は組織をより持続的にしていきたいと思っています。

池上：ICUに国際機関で働きたい人が集まって欲しいし、そのサポートができる会になっていたらと、長期的には思っています。

森田：DIPSの枠組みがなくなっても、国連の会としてこれからもお互いをサポートしていきたいです。先生方もできる範囲で支援を続けていきたいと思っていますし、私自身はいち同窓生として活動を続けていくつもりです。

国連はいま難しい段階にあって、職員の数も減らしていますが、長期的には絶対に必要な機関です。若者が国際的に活躍する日本になってほしいし、その人材が十分にICUにはいると考えています。

大竹：DIPSが同窓会の国連の会支部になるポジティブな側面としては、現役学生と卒業生とのつながりをより強めることができる点です。就職後のキャリアにおいても、人のつながりは大事。同窓会活動ならではの意義だと思うし、つながることで新たなムーブメントが生まれてほしいです。

HOMECOMING DAY

ICUでホームカミングデー開催

本館改修のお披露目で約1000人が来場

文：同窓会事務局

卒業生を対象としたホームカミングデーが2025年9月21日に開催された。今回は本館の大規模改修工事の完了に合わせた開催となり、「本館お披露目 Open House ～73年の歴史とさらなる未来へ～」をテーマに実施された。当日は晴天に恵まれ、約1000人を超える卒業生や関係者がキャンパスを訪れた。

ホームカミングデーは、卒業生が学生時代を過ごしたキャンパスに戻り、大学の現況に触れながら同窓生同士の交流を深めることを目的に、大学と同窓会が共催で毎年行われている行事である。ICUでは、卒業後も大学とのつながりを維持する機会として定着しており、世代や専門分野、在学中の学修

経験を越えた再会の場となっている。当日は本館を会場に講演や対話型企画が行われた。このうち、本館改修をテーマとした講演では、卒業生で、青山学院大学教授の榊島榮一郎氏(37 ID93、GSPA97)が登場し、「本館はどのように変わったのか」を具体的に解説した。講演では、建物の保存と更新の考え方、教育環境としての機能向上のポイントなどが紹介され、参加者には改修の背景や意図を理解する機会となった。長年親しまれてきた本館が、歴史を継承しながら新たな役割を担う空間へと生まれ変わったことが、具体的な事例とともに語られた。

続いて、M・ウィリアム・スティールICU名誉教授によるICUの歴史をテ

ーマとした講演が行われ、大学創設期から現在に至るまでの歩みが振り返られた。また、ICU理事長で13期生の竹内弘高氏による、ハーバード・ビジネス・スクール流の対話型授業「白熱教室」も実施された。参加者が意見を交わしながら議論を深める姿が見られ、学生時代を思わせる学びの空気が教室に戻ったとの声も聞かれた。

本館内の教室では、ICUのホームカミングデーの特徴の一つである、卒業年度や学科、ゼミ、サークルごとに集まるミニ・リユニオンが数多く行われた。事前に企画された集まりに、当日の再会をきっかけに自然発生的に参加する場面も見られ、少人数ならではの密度の高い交流が各教室で展開されて

いた。午後には、入学から10年・20年・30年・40年の節目を迎えた卒業生を対象に、周年記念同期会が大学食堂で開かれた。午前中にミニ・リユニオンで顔を合わせた参加者同士が再び合流する姿も見られ、交流が一日を通して重層的に広がっていった。

次のホームカミングデーは、2026年5月10日(日)に開催される予定である。入学40周年(34 ID90)、30周年(44 ID00)、20周年(54 ID10)、10周年(64 ID20)を対象とした周年記念同期会も実施される。



ICU教会結婚式サポート

ICU教会での結婚式のご予約・ご相談、学内施設の施設貸出、ケータリング紹介などご用命ください

はちろう LINEスタンプ 好評発売中!

国際基督教大学事業会社
株式会社ICUサービス
国際基督教大学内 D館西棟2階
0422-33-3530 (weekday 9:00-17:00)
info@icu-service.com



学内施設貸出



学内イベント
ケータリング紹介






翻訳・通訳 37年の経験と実績

募集!
通訳者・翻訳者

Join our growing team!

We offer diverse opportunities for experienced interpreters & translators to shine as communication professionals




通訳 東京・横浜のほか大阪、名古屋、福岡でのお仕事もあります。
オンサイト/オンライン(英語・仏語・アジア言語)

翻訳 IR資料/金融/会計/法律など
(英語・仏語・アジア言語)

Contact:

三枝雅恵 (Ms. Masae SAEGUSA, President) まで
☎ 090-7176-6500
URL: <https://www.exim-int.com>

※通訳・翻訳のお仕事のご相談・ご依頼も歓迎します。

〈東京事務所〉〒105-0013 東京都港区浜松町2-1-16 第3柏谷ビル 3F E-mail: tokyo@exim-int.com
President 永島 克彦(14期) Advisor 比奈地 康晴(14期)

ICU卒業生、続々と結婚が決まっています!

他社やアプリで苦戦していた方々が、レポートで次々にご成婚!

- ・30代男性：他社で2年、お見合い成立率2~3% → レポートで48%にUP、**3.5か月でご成婚!**
- ・30代女性：他社でお見合いやデートが「苦痛」 → 毎回楽しい♡に変わり、**5か月でご成婚!**
- ・20代女性：アプリで出会った彼は結婚願望なし → 最高の相手と出会い、**5か月でご成婚!**

ICU卒業生の婚活、応援中!

ICU卒業生限定 特別価格

初期費用 ~~77,000円~~ → **33,000円** (税込)

*他に月会費 11,000円とご成婚料(通常の半額)が必要です

ICU男子(特に30代)大募集!

女性や他の年代の方も引き続き大歓迎です

- 業界最大級の結婚相談所連盟に加盟
- 紹介できる登録会員は約 **85,000人**
- 東京都大田区を拠点に**全国オンライン対応**

結婚したあとも、ずっと幸せにいられる関係を大切に
婚活をサポートしています。

実績

2025年度 TMSアワード 成婚数部門 シルバー賞 受賞
2025年度 上半期・下半期 成婚率の高い相談所として表彰

結婚相談所 レポート

RAPPORT

代表 古川 美穂子 (旧姓: 山沢)
2002年ICU卒業



ご興味をお持ちの方は

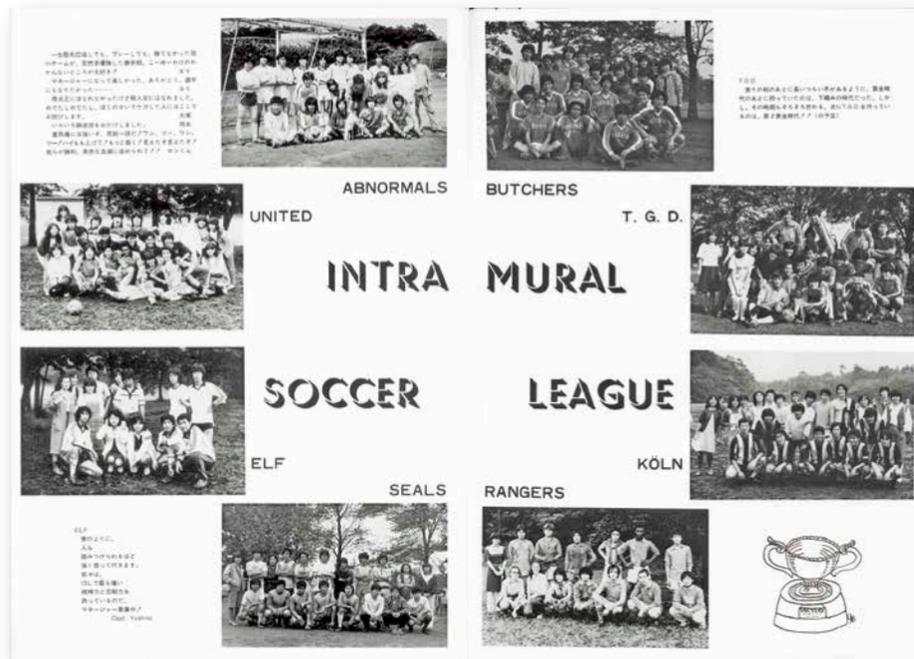
- 1 公式LINEにご登録
- 2 古川の自己紹介動画をご視聴
- 3 無料コンサルにお申し込みください




(公式LINE) (成婚者の声)



ISLの発足を報じるWeekly Giantsの記事



1983年版Yearbookより



1997年版Yearbookより

三鷹の森の伝説的リーグ「ISL」とは何だったのか

リベラルアーツな空気が生んだ、熱き「学内」サッカー史

文：藤谷 健 (30 ID86) 写真：富岡徹郎 (26 ID82) 提供

国際基督教大学 (ICU) には、かつて「ISL」と呼ばれる学内サッカーリーグが存在した。正式名称はIntramural Soccer League。体育会サッカー部とは異なり、学生・教職員・留学生・卒業生が垣根なく参加し、2016年に正式に廃止されるまで、約40年にわたって続いたリーグだ。学内の有志によって運営されてきた、まさにICUらしいスポーツコミュニティだった。

時を経て2025年9月、ホームカミングデーに合わせてISLのミニ・リユニオンが初めて開催された。これを機に、関係者から寄せられたメッセージや学内新聞 Weekly Giants の記事などをもとに、昭和から平成にかけて多くの学生や教職員、OB・OGを熱狂させたリーグの足跡をたどる。

すべては一試合から始まった

ISLの起源は、1977年にさかのぼる。当時、1年生とFreshmen English Program (FEP、現ELA) スタッフの間では、タッチフットボールの試合を行う慣習があった。後にISLの創設メンバーとなる長島純平さん(25 ID81)は、

「フットボールでは勝てる訳がない」と感じ、親しかった教員のピーター・マッキヤグ(Peter MaCagg)氏にサッカーの試合を提案する。マッキヤグ氏がスチュアート・ピッケン教授(Prof. Stuart Picken)に話をもちかけた結果、教員や留学生を中心としたチームと、長島さんの友人たちを中心としたチームが結成された。後の強豪「Rangers (レンジャーズ)」と「Seals (シールズ)」の原形である。これが、ISLの最初の一步だった。

その後、対戦を重ねる中でチームは次々と生まれ、「リーグ戦をやろう」という声が学生たちの間で共有されていく。Butchers (ブッチャーズ) を立ち上げた濱崎健さん(24 ID80)は、セクションメイトや欧州でサッカー経験のあるセプテンバー、友人の友人などに声をかけ、チームを結成したと振り返る。

学内紙が伝えた黎明期の熱狂

こうして1978年春学期、5チームによるリーグ戦がスタートした。1978年3月8日付の Weekly Giants は、「もの好き Prof. Picken サッカ

ーリーグ結成」という見出しでISLの発足を報じている。

記事によると、ピッケン教授が発起人となり、学内の「サッカー狂い」が集結。「その上、学長にCupを出させることに成功した」とある。参加チームとして記されたのは6チームで、そのうちICU Rangers、Seals、Butcher's team、Three Great Dragons (TGD)、ELFの5チームで開幕を迎える。記事には「各チームとも非常に張り切っており、Three Great Dragonsなどは春休みに合宿を組むと言っていた」と記され、当時の熱量の高さが伝わってくる。

ISLは最初のシーズンから白熱した。6月1日の最終戦では、優勝の可能性を残すRangersとTGDが激突。試合はシーソーゲームとなり、2-1でRangersがリードしたままロスタイムに入る。しかし「残り時間1分」、TGDがコーナーキックから劇的な同点弾を決め、決着は翌週のプレーオフに持ち越された。

6月8日のプレーオフでは、メンバー不足に泣いたTGDに対し、万全の布陣を敷いたRangersが5-0で圧勝。

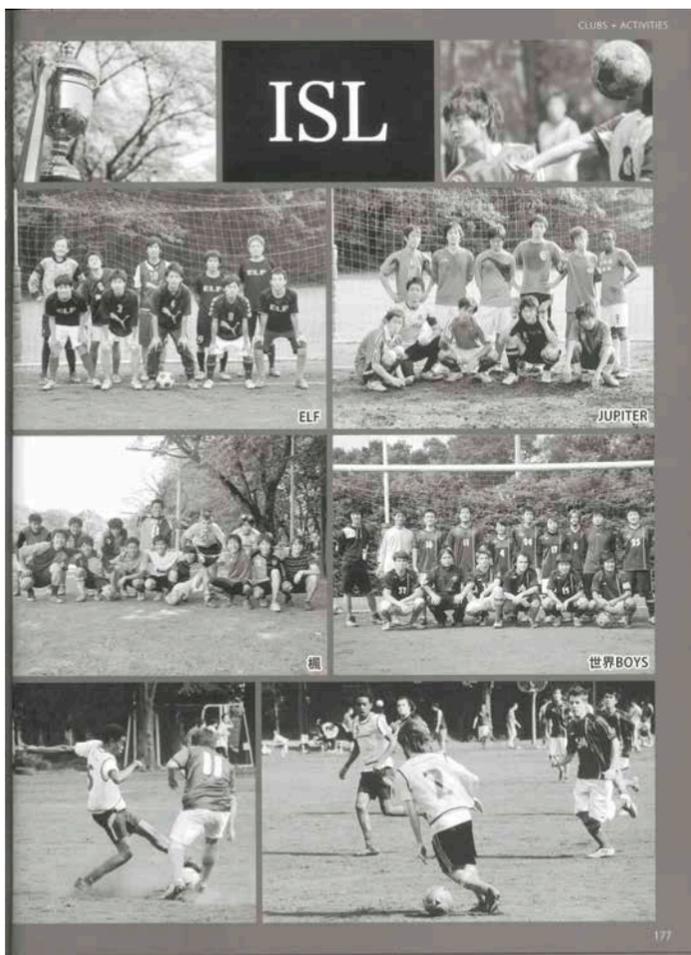
記事は「Rangersは終了前に、このInternal Soccer Leagueの創設者でありRangers主将のProf. Picken氏を入れ、優勝に花をそえた」と結んでいる。

「誰でも参加」ICUらしさ

ISLの最大の特徴は、その開かれた参加形態と多様性にあった。サッカー経験者から初心者、女子学生、留学生、教員までが同じピッチに立ち、「ガチ勢」と「エンジョイ勢」が共存していた。交代人数の制限もなく、「誰でも参加できる」ことが大切にされていたのである。

運営を陰で支えた存在として欠かせないのが、初代ジェネラルマネージャーを務めた川原(旧姓・秋元)みゆきさん(23 ID79)だ。米国の大学からトランスファーで2年生として入学し、D館で知り合った勝登さん(後述)や濱崎さんに誘われ、試合日程の調整や名簿作成、連絡係、さらには武蔵境や吉祥寺界限での飲み会(当時は「コンパ」)の段取りまで担っていた。

中でも印象深いのが、全チームの名簿作りだったという。各チームから氏



(上) 当時の写真などを見ながら、昔話に花が咲くOB・OGたち(下)会場には、創設メンバーのひとり、ジョン・カピラさん(25 ID81、右から3番目)の姿もあった。いずれも2025年9月21日、東京・三鷹のICU本館H-252教室

2012年版 Yearbook より。Yearbookに掲載されたISLの写真はこれが最後となっている



名、学年、出身校、連絡先を集め、8チーム分を手書きで原稿にし、冊子として配布した。携帯電話のない時代、家電や寮の電話が唯一の連絡手段だった。その名簿をきっかけに、出身校や居住国が同じ先輩・後輩と再会したメンバーも少なくなかったそうだ。

見えない壁を越えた共同体

ISLは、ICU独特の「リベラルアーツ」な空気を体現する、自由で国際色豊かなコミュニティでもあった。TGDで活躍した勝登さん(24 ID80)は、次のように振り返る。

「1970年から76年まで英国で過ごし、日本語や日本文化から切り離れた状態でICUに入学しました。どう融合するか手探りの中で、ISLは『本ジャパ』『変ジャパ』『ノンジャパ』の区別なく、横と縦のつながりが広がる場でした。実はISLは、ICUの中にあっただ見えない壁を、結果として壊したのではないかと考えています」

2シーズン目の秋学期には、United、Köln、Abnormalsが加わり、リーグは8チーム体制へと発展する。

1982年4月に入学した筆者(藤谷)はRangersに加わった。ISL発足から5年目のことだ。チーム名は、ピッケン先生の出身地である英スコットランド・グラスゴーの名門チーム、グラスゴー・レンジャーズからとり、青を貴重とするユニフォームもほぼ同じデザインだった。チームは、ノンジャパニーズのメンバーが多く、ISLの中でもっとも国際色が豊かなチームだった。

私自身、1年の時に履修した英語開講の授業についていけず困っていた時、マネージャーからノートを貸してもらったり、Rangersの選手がピッケン先生のインクリ(キリスト教概論)を履修すると、Aがもらえるという噂を信じたり、学期末にはキャンパス内の先生の自宅でバーベキューをしたりと、学生生活で最も懐かしい思い出の一幕となっている。ピッケン先生の、耳を覆いたくなるような汚い野次には、時に辟易としたが。

40年の歴史、静かに幕

最盛期には、火曜日のチャペルアワーと木曜日のコンボケーションアワー

に、2試合ずつ実施。チーム数は最も多い時に10を数えた。

しかし次第に参加するメンバーが減り、選手の数も足りず、試合が成立しないことが続くようになった。かつての名門チームの変遷にショックを受けた創設メンバーもいる。Abnormalsの望月良門さん(26 ID82)は、後年、チームがメンバー不足からライバルのTGDと合併し、Ab-TGDとなっていたことを知り、驚きを隠せなかった。

そしてその歴史は静かに幕を下ろすことになる。最後までISLに関わっていた円田洋一さん(32 ID88)の証言により、その最期が明らかになった。

「ISLのリーグ戦(公式戦)が行えたのは2013年春学期まででした。チーム数が減り、人数不足の中で公式戦を行っており、充実した試合はできていなかったと思います。その後はSNSで声をかけあい、全体合同でミニゲームを行っていましたが、2016年3月に廃部(廃団体)となりました」

創設から40年。学生気質の変化、運営負担の増加、そして多様な娯楽の出現——様々な要因が重なり、一つの時代が終わった。

再会の輪、次なる展開へ

2025年9月のホームカミングデーには、ISLでプレーしたOBやOGらが、会場となった本館のH-252に集まった。教室には、当時の写真やWeekly Giantsの記事、Yearbookに掲載された集合写真などが展示され、訪れた人たちが懐かしそうに見入りながら、当時に思いを馳せていた。

当日参加できなかった川原さんは「入学して約50年経っても、ISLを通して出会った仲間とこうして親交を深められることが何よりうれしい」とメッセージを寄せた。これは、ISLに関わった多くの人に共通する思いではないだろうか。

今回のミニ・リユニオンを提案した大学理事会の富岡徹郎常務理事(26 ID82)は、「初めての企画でしたが、予想以上の反響がありました。次回は、もう少し大きな規模で同窓会を開きたいですね」と語り、再会の輪がさらに広がることへの期待をにじませた。

私たちは、「はたらくをよくする®」会社です。

PEACEMIND



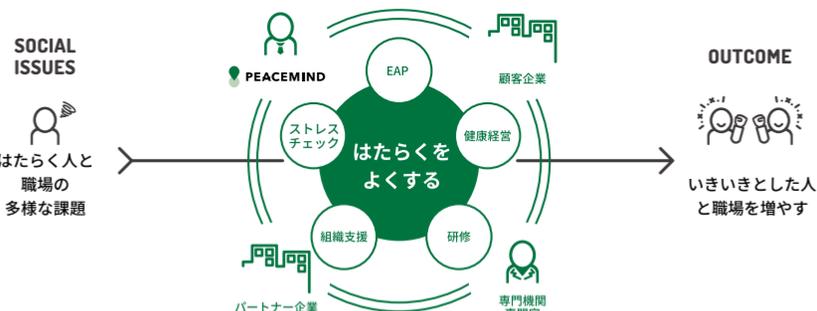
ピースマインド株式会社
代表取締役社長・
共同創業者
荻原 英人 (ID00)

ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、心豊かな未来を創る」をミッションに「はたらくをよくする」ソリューションを提供している企業です。

職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の皆様からのご相談をお受けしています。

国内外のグローバル企業の成長支援と一緒にチャレンジしてくれる仲間も募集しています。

Working Better Together®



ピースマインド社内の「はたらくをよくする」取り組みを紹介しています。ぜひご覧ください。
エンプロイヤーサクセス部
人事総務グループ長
小島 真理 (ID87)

- EAP 従業員支援プログラム
- 産業保健支援サービス
- ストレスチェック
- 健康経営支援
- 研修
- クライシス支援
- 休職・復職者支援
- ハラスメント対策支援
- ウェルネスプログラム



WHY
PEACEMIND

サービス開始から
27年
お取引企業
1400社/年
外資系顧客構成比
35%

ピースマインド株式会社

タナバコンサルティンググループ (東証プライム上場: 9644) グループ会社 | ホームページ ▶ 03-3541-8660





事務局移管後、初の評議員会開催

文：長谷川由紀(本誌) 写真：同窓会事務局

同窓会の評議員会が2025年9月27日午後、ダイアログハウス国際会議室で開催された。4月に同窓会の事務局業務が大学に移管されて初めての評議員会で、2025年度上半期の活動報告、財務報告などが行われた。また、「明日の同窓会プロジェクト」に関し、今後、事務局移管に続いて校友会化を含めた同窓会の方向性について協議していくことが報告された。

評議員会は対面で開かれた。評議員29人、学生評議員1人が出席(委任：72人)また、欠席者向けにZoomでの配信も行った。議事に先立ち、湯浅八郎・細木盛枝記念奨学金の対象者がいなかったことが報告された。

評議員会では、廣岡敏行同窓会長が上半期の活動報告を行い、9月のホームカミングについて、事務局移管後初めての協業で、理事、評議員、事務局

員だけでなく、教職員も含めて多くの協力があり、大盛況の開催となったことを報告した。廣岡会長は「(移管後)初年度は活動もあまり変わらないかと思っていたが、ふたを開けてみれば大変革できたホームカミングとなり、第一歩を踏み出したのではないかと思う」と想定を超える成果だったことを明らかにした。

活動報告に続いて、2026～2027年度の理事・監事・評議員の選考について選考委員会の新井亮一委員長から報告が行われた。現在の理事・監事・評議員の任期は2026年春に終了する。新井委員長は選考手続きを説明した上で、「新しい人、新しい考え方を持った人を広く募っている。推薦をお願いしたい」と要請した。

質疑応答では、奨学金の対象者がいなかったことに関し、理由や過去の経

緯、条件の周知などを求める声が出た。また、次期体制の選考に関して、対象者や貢献度などどのような基準で選ぶのかについて質問や意見が出た。

最後に特別議事として、廣岡会長が「明日の同窓会プロジェクト」に関する経過を報告した。この中で、廣岡会長はこれまで3年余りにわたって課題の洗い出しや活性化に向けた方策などを話し合ってきたと説明。大学への事務局業務移管が終了し、卒業生だけではなく教職員も含めた校友会化を一つの方向性として検討していると語った。現行制度では卒業生が正会員、学生が準会員、退職者を含む教職員のうち希望者を特別会員となっているが、校友会では卒業生と退職した教職員のうち希望者を正会員、在學生と現役の専任教職員などを準会員とする案が出ている。会費も含めて詳細は今後、検討す

るといふ。

会場からは、事務局の業務移管にかかる人件費や、校友会化によって教職員がどうなるか、途中退学者の取り扱い、父母や企業など賛助会員を設ける可能性など幅広い意見や質問が相次いだ。

評議員会後、学食などで同窓会の各部が部会を開き、活動などについて話し合った。その後、アラムナイハウスで懇親会が開かれ、参加した理事や評議員は、軽食やICUワインなどを手に近況や在學当時の話で盛り上がっていた。会場には同窓会のスカーフを身につけたICUマスコット「はちろう」のぬいぐるみをはじめ、同窓会のグッズが展示され、その場で買い求める同窓生も。特に「はちろう」グッズは人気で、表情の微妙な違いを見極めて好みの「はちろう」を選ぶ姿も見られた。



TRUST CLUB エリートカード 初年度年会費無料

カード入会による入会手数料は大学事業会社を通じて大学に還元されます。ぜひこの機会にお申し込みください！

2年目以降年会費 **3,300**円(税込) 家族カード ETCカード 年会費 **無 料**

WEB入会 右記2次元コードを読み取りいただくか、以下URLをブラウザへご入力ください。
https://www.sumitclub.jp/entry_form/lp/elite1/index.html?asrf=sb_13

お問い合わせ 三井住友トラストクラブ株式会社
0120-370-070 受付時間：9～17時(土・日・祝日・12/30～1/3を除く)



お申し込みはこちらから

三井住友トラストクラブ
SUMITOMO MITSUI TRUST CLUB

Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間スポットを当て、その活動や経緯などについて話を聞く本シリーズ。今回は、岡山理科大学教授で教育研究に携わるシャミ・ダッタさんにお話をうかがった。

「探究学習」と「地域の活性化」をつなげ、リードする

岡山県 岡山理科大学教授 シャミ・ダッタさん (34 ID90)

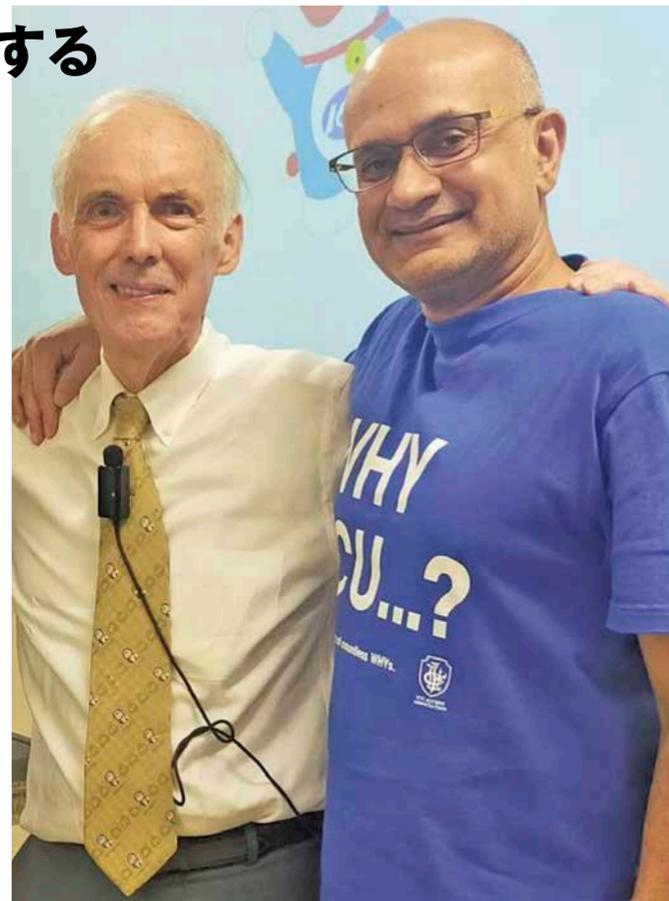
文：今井 順(本誌) 写真：本人提供



地域の人々と生徒をまじえて
ディスカッション



国際教育についての民間研究所でインタビューを受ける
© インターナショナル・エジュケーション・ラボ (IEL)



恩師スティール先生と

シャミ・ダッタさんがアドバイザーを務める都内のとある高校。その「探究授業」の発表会に、ダッタさんと一緒にお邪魔した。ある教室では生徒たちが発表し、別の教室には論文が展示してある。どの発表も熱心で、親たちも聴き入っている。読ませる、魅せる論文の前には人が集まっている。校内を一緒に歩くと、生徒たちが近づいてきて、ダッタ先生ににこにこあいさつ。教員たちも次々に現れて、指導の成果について意見を求めてくる。

現在中等教育の世界では、生徒自身が問いを立て、調べ、発表や論文として形にする「探究」という取り組みがあり、重要性を増している。国際ナショナル・バカロレア (IB) や、日本の学校における「総合的な探究」がそれにあたる。こうした取り組みを国内でリードしてきたのがダッタさんだ。彼と話していると、なぜ生徒が自分で考え、調べることが必要なのか、どうすればそのように動機づけられるのか、その哲学や目的、ノウハウを整理した言葉があふれるように、よどみなく出てくる。

運命的な社会の授業

ダッタさんはインドのニューデリー生まれ。13歳で東京へ移り住み、セント・メリーズ・インターナショナル・スクールに入学した。理系だったダッタさんだが、高校の社会の時間に運命的な経験をする。外国人として日本に住み、日本社会に様々な疑問があった。その疑問を持っていくという授業で、先生は答えをくれなかった。自

分で調べる機会をくれたことで、生徒たちはがぜんやる気になって調べた。なぜなら「自分の問い」だから。ダッタさんが見つけたのは、単純だけど大事な真実。昔があるから今がある。社会、文化、国際関係、何にでも過去の文脈があって今がある。今の日本を理解するためには歴史の勉強が必要なのだ。そういう理路と好奇心がダッタさんに宿った。自分もそんな好奇心を育てることのできる教師になりたい。そう思うようになった。

完全に英語の環境よりバイリンガルな方が良いと思いICUに入学。一年間第二男子寮で過ごした。飲みすぎると新聞の上に寝かせてくれる優しい先輩がいたりして楽しかったが、勉強にはちょっと向いてなかった。専攻は日本史。スティール先生に就いて学び、ICU高校で教育実習をした。ICU高校は自由な授業設計を許してくれ、スティール先生は、高校教員志望なら海外大学院に行くべきと冒険を薦めてくれた。既に受給していた文科省の奨学金を諦めても海外に行くという決断ができたのは先生の後押しがあってこそ。事務方にもお世話になり、ICUは人生を変える援助をしてくれた。

最初の就職もICUが起点だった。大阪で面白い学校を作るからと誘って

くれたのが、ICU高校で知り合ったICU 2期の先輩。日本史研究で有名なブリティッシュ・コロンビア大学で勉強していたダッタさんに仕事のオファーが来た。2年かかる修士課程を、夜も寝ずに勉強をして1年半で修了。1992年の4月から、千里国際学園(現関西学院千里国際中等部・高等部)でIBの精神をふまえた日本史担当として着任した。

生徒を地域に

そこから24年。現在「探究」と呼ばれる教育方法の開発、展開に精魂を込めて取り組んできた。学習は十割モチベーション。個々の生徒に違いがあり、動機を持ち方も千差万別。その心にいかに火をつけるのが課題だった。「地域」に関心を持ったのもそういう問題意識があったから。偏差値的な教育とは一線を画す高校だったので、生徒はいわゆる推薦入試を受験し秋には進学先が決まっていく。すると、3年生の3学期にやることのない。この機を利用して、生徒たちを学外に出すことにした。たとえば奈良や京都の地域に眠る、古くからの建物や慣習、モノや食べ物をどう残すのか、そんな取り組みでうまくいっているものはあるか? なぜうまくいっているとされる

DATTA, Shammi

1990年ICU卒業。1992年にカナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学大学院修士課程を経て、千里国際学園で日英バイリンガル社会科・IB教諭として着任。同校でIB部長、その後東京学芸大学教職大学院准教授・IB教員養成ディレクターを経て、現職。文部科学省IBコンソーシアム、教育委員会等のアドバイザー、日本国際バカロレア教育学会副会長、国立台湾師範大学客員教授、IBワークショップリーダーなど兼任。ならまちリーグのアカデミック・アドバイザーなども務める。

のか? 成功の理由は? 成功を永续するために必要なことは? 生徒に問いを立てさせ、現地に赴き、考えさせた。「総合的な探究」の取り組みだ。今ではこうした取り組みをきっかけに、奈良では「ならまちリーグ」といった、地域と学生・生徒をつなぐ対話の場が育っている。

探究学習のグルとして

2016年からは、そんな指導のできる教師を育てる側に回った。教師育成で知られる、東京学芸大学に請われ、IB教員を育てるプログラムを立ち上げた。IBに目を付け始めた日本の教育政策もあり、最先端の取り組みだった。ここで育てた教師たちが、今IBに限らず、冒頭に挙げた高校のように、全国で探究授業を担当している。「地域」とはいえ、京都や奈良はメジャーな観光都市。さほどでもない岡山を新しい挑戦の地に選んだ。岡山理科大学では、これまでの経験を盛り込んでいる。グローバル・コンピテンシーを持ち、地域を元気にできる教師を育成するのがテーマ。時には地元の高校生にも教えつつ、各地の公立・私立高校、そして台湾の教師たちにも、探究するマインドを育てる教育を広げている。

A_People 山田真寛 (49 ID05)

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

現在、世界には約6000から8000の言語があるとされるが、そのうち約半数が「いま何もしなければ失われてしまう」という。2009年、ユネスコが発表した「危機に瀕した言語地図」では、日本における「消滅危機言語」としてアイヌ語、八丈語、奄美群島と沖縄諸島の6つの琉球諸語、計8つの言語が挙げられた。2010年から沖縄県与那国島で、2015年から鹿児島県沖永良部島でフィールドワークをしながら、島の人びとの言語の継承保存活動に伴走する山田真寛氏は、「今ならまだ危機言語の復興は可能だ」と説く。

文：太田順子（本誌） 写真：本人提供



(左) 沖永良部島にて (右) 公民館講座で学ぶ島の人びと

言語学に魅せられて

——ICUにはもともと心理学を専攻するつもりで入られたそうですね。

山田 はい。でも、ICUは関心がある科目を好きなようにとれるので、本当に興味の赴くままにとっていたところ、吉田智行先生（2025年3月退職）の言語学の授業に出会ってしまったんです。とにかく面白かった。同じ関心をもつ友人たちと夜を徹して課題に取り組み、「生成文法」関連の論文を読みまくったり、都内の複数の大学院に潜り込んで聴講に行ったりして、学ぶことが楽しくなっていました。3年の夏休みでしたか、アメリカの大学院に進んだ先輩の実験に参加したときに「アメリカなら、君たちが今やっていることで給料をもらえるよ」と言われて、それはいい話だ、と留学を考えはじめました。院がだめだったら、フリーダイビングの選手になるかなと思っていましたね。当時の潜水時間の日本記録が7分7秒、自分のベストが6分40秒で、潜るたびに記録を更新していたのでいけるかなと。幸いデラウェア大学からオファーが得られたので研究の道に進みました。

——デラウェア大学ではどのような研究をなさっていたのでしょうか。

山田 行く前は「シンタクス（統語論）」をメインに考えていましたが、実際には「セマンティックス（意味

論）」の分野で、論理式と関数を用いて人間が言語の意味を解釈する仕組みを研究しました。それと、行ってからわかったのですが、デラウェア大学はフィールドワーク（現地調査）が盛んだったんです。シンタクスの理論研究と並行して、ネイティブアメリカンやマレー語の記録に取り組む研究者がいました。「フィールドメソッド」という、未記述の言語の母語話者の発話を1年かけて体系的に記述することを学ぶ授業が毎年開講されていて、1年目から履修しました。振り返って考えると、そのときの学びは今につながっていると思います。

今なら復興できる

——ユネスコの「危機に瀕した言語地図」は日本でどのように受け止められたのでしょうか。

山田 日本には共通語のほかに8つの独立した言語が存在し、それらが消滅の危機にあることが知られるきっかけになりました。ただ、ユネスコは触れていませんが、全国各地の諸方言も共通語化の波に押されて同じように消滅の危機にさらされています。

こうした認識に立って国語研では、日本各地の地域言語を保存し、言語の多様性を維持するための研究をしています。2009年から現在まで、略称「危機言語プロジェクト」の共同研究員約80人が全国の日本語・琉球語諸方

言の調査を行っています。調査によって得られた、語彙、談話の録音・録画、体系的な文法記述の記録は、22年3月から「危機言語データベース (<http://kikigengo.ninjal.ac.jp>)」として公開されています。

一方、言語の保存を考えるときにはこうした「記録保存」と並行して、話す人の数を維持し、生きた言語を世代を超えて伝えていく「継承保存」も重要です。実際、フィールドワークで関わった地域に暮らす人びとが望んでいるのも、地域のことばが使われ続けることです。言語の「継承保存」は、日本ではまだ研究の蓄積が浅いのですが、沖永良部島での実践を通じて僕は、今ならまだ継承保存は可能だ、と考えています。

——沖永良部島では、どのような取り組みがなされたのでしょうか。

山田 島で生まれ育った幅広い年代の人に、島のことばのリスニングテストをしてみました。60代以上のいわばネイティブ話者と比べて、20代以下の理解度は低かったのですが、30代後半以上は、日常的に使っていないため流暢に話すことはできないけれど、理解度に統計的に有意な差はないという結果が得られました。祖父母や親が家庭内で話すのを聞いていたからですね。言語の継承保存においては、この「聞けばわかるけど流暢には話せない層（潜在的な話者）」が鍵になります。

YAMADA, Masahiro

1982年、北海道函館市生まれ。2005年、語学専攻卒業。在学中はスキューバダイビング部ORCA(オルカ)に所属し、フリーダイビングにも熱心に取り組んだ。2010年、米デラウェア大学大学院でPh.D.取得(理論言語学)。帰国後、京都大学、広島大学、立命館大学での任期付き研究職を経て、2018年より国立国語研究所准教授。2022年より「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトのリーダーを務める。

沖永良部島では、継承保存活動に積極的な人が多くいて、2019年から公民館講座として用例と合わせた語彙リストの作成、動詞の活用の記録、方言の教え方などを学ぶ場が設けられました。田皆という集落では、島の人たちだけで語彙収集を行い、2025年夏には1200語の辞書の発行が実現しました。すぐに第2版の作業も始まっています。また「師匠」となる話者と学びたい人が継続して集中して対話することで話す力を獲得する活動も2024年から始まりました。かなり上達した人が出てきています。言語の保存は、地域で生きる人たちが継続的に楽しみながら取り組むこと——実はそれが難しさでもあるのですが——によって可能なのだという確信を得ることができました。

地域言語の絵本をつくる

——これから取り組みたいことは？

山田 これまで、多良間島、竹富島、沖永良部島、与那国島、小浜島の5つの島のことばで伝承を語る絵本を作りました。巻末には簡単な文法解説を付し、朗読動画も用意しました。地域に伝わる昔話には、暮らしのようすや考え方といった文化も表れています。子どもにとって生まれた場所のことばに触れる入口になりますし、親にも子どものためなら読んでみようという動機付けになる。そして島のことばを学ぶ人の教材としても手に取りやすいです。研究費だと重版ができないのでクラウドファンディングで作りましたが、この試みをもっと重ねていきたいです。アラムナイの読者にこのプロジェクトに投資してみようという方がいたらうれしいのですがどうでしょうか（笑）。

お邪魔します! あのメジャー

全31の中から気になるメジャーを紹介

メジャー紹介の記事も、
ついに31個目のメジャーのご紹介となった。
ラストを飾るメジャーは、アジア研究である。
急速な発展を続けるアジア地域の
何に焦点をあて、何を学んでいくか。
アジア研究のもつ魅力と可能性について、
ウォルター P.ドーソン先生にお話を伺った。

文・写真：谷澤 聡 (本誌)

第31回 アジア研究 ウォルター P.ドーソン 上級准教授

DAWSON, Walter P.

国際基督教大学 (ICU) 教養学部 上級准教授、アジア研究プログラム主要コーディネーター。専門領域は教育政策研究、政治学、開発研究、アジア地域研究、人権・民主化研究。日本、韓国、カンボジア、タイなど、人生の半分近くをアジアで過ごし、同地域の教育と開発分野に精通。ノースカロライナ大学チャペルヒル校でBAのアジア研究メジャーおよび日本語マイナーを得た後、コロンビア大学で比較教育学・政治学のPh.D.を得る。主要研究テーマは、教育の平等機会、EFA、シティズンシップ教育、民主主義と政治移行、アジア・西欧諸国とカンボジア間の二国間教育援助。国連機関および草の根NGOでの教育・開発関連の実務経験を有し、現地の教育支援と政策研究の双方に取り組む。教育機会の平等化と社会的不正義の是正へのコミットメントを研究基盤としている。



リベラルアーツで専攻を「仕立てる」

アジア研究は、複数の学問分野にまたがる学際的なメジャー (Interdisciplinary Major) として、学生の学修とキャリアに対する柔軟性を核として設計されている。これはICUが大切にしているリベラルアーツの精神に根ざしており、学生は、多様な分野から自身の関心に応じて専攻を「仕立てる」ことが可能である。この柔軟性は、ICUにおける専攻の成り立ちや授業構成そのものに深く根ざしている。

選べる自由と広がる学び

ほかのメジャーと同様に、アジア研究を学際的なメジャーとして学生向けに紹介する際にはポスターを用いたセッションを行うが、その際に強調しているのは、アジア研究では導入科目である「アジア研究への招き」以外には必修科目を持たず、幅広い分野から履修を組み立てられる点である。導入科目ではアジア研究に関わる幅広い教員が講義を担当する。講義テーマとして日本・中国間の国際関係、中国の少数民族の文化、人類学から見たタイの家族内の人間関係、インド独立後の分配、韓国の経済開発、カンボジアの開発と教育、中国の道教と宇宙論、ラオスのLGBTなどをアジア研究の魅力として紹介している。アジア研究を担当する教員は、歴史学をはじめ、国際関係、経済学、人類学、宗教 (インド・

中国の宗教) といった多岐にわたる領域を専門としている。そのため、学生は社会科学を横断的に学ぶことが容易で、個々の興味や将来の方向性に合わせたカリキュラムの設計が可能である。こうした「選べる自由」は、アジア研究が扱う対象地域の理解を深めるために、言語学習や海外留学とも自然につながっていくのである。

また、地域研究 (Area Studies) において、現地の言語を学び、その社会や文化を直接経験することは欠かせないと考えている。アジア研究も例外ではなく、中国語、韓国語、アラビア語に加え、近年ではインドネシア語など、言語学習が充実している。ICUではアジア地域の大学と多数の交換留学プログラムを結んでおり、中国、香港、インドネシア、韓国、フィリピン、台湾、タイ、インドなど、多様な地域で学ぶ機会が用意されている。さらには、留学先で取得した単位を編入することもできるため、学生としても学びを中断することなく国際的な経験を重ねていくことができる。

幅広いキャリアへの可能性

学際的な履修と実地での経験を組み合わせることで、学生は特定の国や地域について多面的に理解を深めていけると考えている。授業や文献による研究にとどまらず、言語の運用や現地での体験を通じて、その国の社会、経済構造、政治体制などを総合的に把握で

きるようになる点は、アジア研究の大きな強みである。最終的には、対象地域に関する深い専門性を備えた「国・地域別エキスパート」 (country/region expert) や「アジアエキスパート」としての視座を獲得することが期待されている。

柔軟で広範な学びは、そのままキャリア選択の幅広さにもつながっている。アジア研究の卒業生は、専攻で身につけた分析力、言語運用能力、地域理解を活かし、多様な進路に進んでいる。たとえば、商社などのビジネス分野、経済・政治を扱う企業や金融機関、さらにはMBA取得を視野に入れたキャリアもある。そのほか、公共・国際機関の分野では、日本の省庁、JICA、国際開発、外交、世界銀行、ユニセフなどが代表的であり、国際機関を志す場合は、アジア研究を基盤に海外大学院で修士号を取得するケースも多くある。さらなる学術や研究の道へ進む学生もおり、国連や草の根NGOでのコンサルティングなど、専門性を活かせる働き方も可能である。

一方で、幅広い分野に触れられるからこそ、ある段階で自分の関心を収束させるが必要になる。その契機となるのが卒業論文 (Senior Thesis) である。卒論では、国際関係、開発学、経済、ビジネスなど、学生自身が深めたいテーマを選び、それを専門的に掘り下げていくことになる。学修の集大成としての知的成果を得るだけでなく、

卒業後にどの方向へ進みたいのかを自覚的に整理する場にもなっていく。

展望：成長するアジア地域と可能性

アジア地域は、インドや中国のような大国に加え、ベトナムやカンボジアといった新興工業国 (NICs) など、きわめて急速に変化および発展し続けていく地域である。こうした地域と密接に関わることは、学生にとって将来のキャリア機会の拡大にもつながり、アジア研究専攻で培った視点や知識がそのまま強みとなっていく。学際的な学びと地域への深い理解を組み合わせることで、多様な職業分野へ柔軟に進むことができる点は、アジア研究の大きな魅力である。

今後、アジア地域では、卒業生にとってさらに幅広いキャリアを構築する機会が増加すると見込まれている。学際的なアプローチを経て、学生が何を学ぶか、どのようなスキルや知識を得るかによって、可能性は広がっていく。アジア研究で習得した専門知識やスキルは将来の国際的なキャリアに活かすことができるだろう。アジア研究の価値、それはアジア地域の経済成長という追い風を背景に、学生が多角的かつ深い専門知識を身につけることで、国際的な舞台上で活躍するための多様なキャリアパスを切り開く点に集約されていくことだと信じている。



歴代インタビューから

ICUのメジャーを紹介してきたシリーズが、本号で完結を迎えた。
15年という長きにわたり、先生方のインタビューを担当してくれた編集部の2人の仲間からご挨拶させていただく。

小林智世さん

(52 ID08 社会科学科卒)
KOBAYASHI, Tomoyo

担当時期：第3回(2012年3月号)
～第16回(2018年9月号)

「お邪魔します！あのメジャー」が始まったのは、ICUにメジャー制が導入された2010年のことでした。学科がなくなると一体どうなるのかという編集部員たちの関心、そしてICUの学びに焦点を当てた記事を充実させてほしいという読者からの声が、この連載企画が採用された大きな理由でした。

単発記事しか書いたことのなかった私が第3回から連載を任された際は、責任が重くなってしまった！と緊張したのを覚えています。

各メジャーで教鞭を執る先生方の取材を通じて、私は時に懐かしいICUと再会し、また時に新たなICUを発見しました。かつてお世話になった宮崎修行先生やツベタナ・クリステワ先生への取材では、分野に縛られない学生時代の学びを思い起こすことができま

した。履修する機会のなかった、または新たに加わった学問分野の取材では、この分野も学んでみたかった、私の代にこのメジャーがあってくれたら……と感じることもありました。それだけICUの学びが幅広く、進化を続けていたということでしょう。

連載完結後も、ICUの知の探求は続いていきます。読者の皆さん、連載を引き継いでくださった谷澤さん、ありがとうございました。

谷澤 聡さん

(54 ID10 社会科学科卒)
TANIZAWA, Satoshi

担当時期：第17回(2019年3月号)
～第31回(2026年3月号)

「ICUには、一体どのようなメジャーが広がっているのだろう？」本連載を通じて数々のメジャーへの取材を終えた今、私の中での解像度は驚くほど高まりました。

各メジャーが放つ個性的で圧倒的な強みのバリエーションに驚かされる一方で、その根底には常に、多様な観点

から本質を問い直す「リベラルアーツの魂」が息づいていました。専門性を深めながらも決して視野を狭めない。この一貫した学びの姿勢こそが、絶えず変化し続ける現代においても、時代に翻弄されることのない「しなやかで揺るがぬ強さ」の源泉だと実感しています。取材の中で、多くの先生方から直接貴重なお話を伺えたことは、私にとっても意義深い経験となりました。

本連載を無事に完結させることができたのは、多大なるご協力をいただいた

た広報・社会連携部やアラムナイニュース編集部の皆様、そして現場で常に伴走してくださった本誌記者の亀山詩乃さん(54 ID10)、滝沢貴大さん(62 ID18)の支えがあってこそです。心より感謝を申し上げます。

読者の皆様に、ICUの持つ知の広がりとその尽きない魅力を、少しでも鮮やかな形でお届けできたのであればこれ以上の喜びはありません。素晴らしい機会に関わらせていただき、本当にありがとうございました。

政治学のデータ

● 開講されている主な授業科目
(2025年度現在)

- アジア研究への招き
- 発展途上国における教育
- 教育社会学上級セミナー：グローバル化と教育
- ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ
- アジア史(中国)
- 日本対外関係史
- 近代中国の社会と文化
- アジア社会史特別研究
- アジア太平洋地域の国際関係
- 中国の政治と国際関係
- 朝鮮半島の政治と国際関係
- 南アジアの政治と国際関係
- 東南アジアの政治と国際関係
- 東洋思想概論
- 日本の宗教
- 東洋思想研究
- 日本の政治
- 東アジアの地域主義
- 国際サービス・ラーニングⅠ
- アジア経済開発分析
- アジア経済特講
- 仏教史
- 比較思想

アラムナイニュース・メジャー記事一覧(肩書は掲載当時)

	メジャー	先生	本誌インタビューアー	掲載号
第1回	メディア・コミュニケーションと文化	田仲 康博 上級准教授	岡田 庄生	114 (2010年10月)
第2回	宗教学	魯 恩碩 准教授	齊藤 ようこ	115 (2011年3月)
第3回	数学	山上 あい子 上級准教授	小林 智世	116 (2011年9月)
第4回	歴史学	那須 敬 上級准教授	小林 智世	117 (2012年3月)
第5回	文学	ツベタナ・クリステワ 教授	小林 智世	118 (2012年11月)
第6回	生物学	小林 牧人 教授	小林 智世	119 (2013年3月)
第7回	公共政策	大森 佐和 准教授	小林 智世	120 (2013年10月)
第8回	美術・文化史研究	リチャード・ウィルソン 教授	小林 智世、佐々木 淳子	121 (2014年3月)
第9回	人類学	ギャヴィン・ホワイトロウ 上級准教授	小林 智世	122 (2014年10月)
第10回	経済学	ヘザー・A・モンゴメリー 上級准教授	吉村 光八・小林 智世	123 (2015年3月)
第11回	環境研究	布柴 達男 教授	小林 智世	124 (2015年10月)
第12回	教育学	西村 幹子 上級准教授	小林 智世	125 (2016年3月)
第13回	経営学	宮崎 修行 教授	小林 智世	126 (2017年3月)
第14回	ジェンダー・セクシュアリティ研究	生駒 夏美 教授	水野 愛子、小林 智世	127 (2017年9月)
第15回	法学	松田 浩道 助教	水野 愛子、小林 智世	128 (2018年3月)
第16回	心理学	磯崎 三喜年 教授	小林 智世	129 (2018年9月)
第17回	物理学	岡野 健 教授	谷澤 聡	130 (2019年3月)
第18回	グローバル研究	毛利 勝彦 教授	谷澤 聡	131 (2019年9月)
第19回	平和研究	笹尾 敏明 教授	谷澤 聡	132 (2020年3月)
第20回	言語教育	半田 淳子 教授、藤井 彰子 准教授	谷澤 聡	133 (2020年9月)
第21回	開発研究	西村 幹子 教授	滝沢 貴大	134 (2021年3月)
第22回	情報科学	石橋 圭介 准教授	谷澤 聡	135 (2021年9月)
第23回	音楽	佐藤 望 教授	亀山 詩乃	136 (2022年3月)
第24回	日本研究	大川 洋 教授	谷澤 聡	137 (2022年9月)
第25回	国際関係学	高松 香奈 上級准教授	谷澤 聡	138 (2023年3月)
第26回	社会学	山口 富子 教授	谷澤 聡	139 (2023年9月)
第27回	言語学	李 勝勳 上級准教授	亀山 詩乃	140 (2024年3月)
第28回	アメリカ研究	レイヴンスクロフト・クレア 助教	谷澤 聡	141 (2024年9月)
第29回	化学	峰島 知芳 上級准教授	亀山 詩乃	142 (2025年2月)
第30回	政治学	具 裕珍 助教	谷澤 聡	143 (2025年9月)
第31回	アジア研究	ドーソン・P・ウォルター 上級准教授	谷澤 聡	144 (2026年3月)

ICUの今を知る～自然編

Zoomによるオンラインイベント実施報告

文：森みどり(30 ID86) 写真：森みどり、濱本ハル(39 ID95)

2025年12月13日(土)、同窓会デジタルコミュニケーション推進部では、場所にとらわれず「ICUの今」を同窓生に届けることを目的に、Zoomを用いたオンラインイベントを開催した。ICUでは多様なイベントが行われているが、参加には来校が必要なものも多く、海外在住者や多忙な同窓生にとっては足を運ぶことが難しい場合もある。そこで、物理的な距離に左右されず最新のICUを共有できる機会として、オンライン形式のイベントを企画した。オンラインであれば同窓生同士が気軽に誘い合えるため、イベント自体がコミュニケーションの輪を広げる契機になることも期待した。

第1回となる今回は、在学中に誰もが親しんだ「自然」をテーマに設定し、ICUの森の現状と保全活動、ファームプロジェクト、学生サポーターによるハニープロジェクトなどを紹介した。

メルマガ臨時号やSNSで告知したところ、初期段階から大きな反響があり、最終的には2期生(1958年卒業)から2020年代の卒業生まで、幅広い世代の145人から参加登録をいただいた。

当日は79人が参加し、ICUの秋の映像上映や、参加者同士の少人数グループでのコミュニケーションタイムを交えながら、ICUの森の「今」を共有した。参加者からの満足度は非常に高く、今後の継続を望む声や同窓会への期待も多く寄せられた。

この「ICUの今を知る～自然編」については、2026年以降もオンラインイベントとして継続して実施する予定である。ICUキャンパスに実際に足を運ぶイベントと並行しつつ、物理的な距離の制約を超えて発信できるオンラインでの情報提供を、今後さらに推進していきたい。



秋深まるICUのキャンパスと配信当日の風景

岡山明弘さん (ICU環境推進部管財グループ) OKAYAMA, Akihiro

同窓会デジタルコミュニケーション推進部からオンラインイベント企画の声がかかり、ICU環境推進部として「自然編」をテーマにコンテンツ作成で協業することになった。

キャンパスの玄関口であるマクリーン通りの桜並木、崖下の奥地に広がるわさび田、雑木林で出会ったタヌキ、かつて農場で飼われていた牛など、同窓生が語る自然の思い出は実に多様であり、その幅広さこそがICUの自然環境の豊かさを物語っている。

2023年に建物を除くキャンパス全域が自然共生サイトに認定された

ことは、献学以来、同窓生を含むICUコミュニティ全体が美しい自然を守り続けてきた証でもある。

一方で、今回のイベントでは雑木林の劣化など、現在キャンパスが直面している新たな課題についても共有した。年間100本を超える枯死木を伐採している現状には、驚いた方も多かったのではないかと思う。

また、ファームプロジェクトやハニープロジェクトの発表を通じ、在学生が「学びの森」としてキャンパスの自然を積極的に有効活用している姿も紹介した。

今後も同窓生に向けて、キャンパスの自然の魅力や現状を伝える機会を設けていきたいと考えており、引き続きの関心と支援を寄せてもらえることを願っている。

松本中央法律事務所



【取扱分野】企業法務一般・契約締結交渉・英文契約書・離婚・男女問題・労働問題・遺言・相続・個人情報保護対応・環境問題・債務整理・刑事弁護・各種研修など

弁護士
松本 典子

MATSUMOTO, Noriko
理学科生物学専攻卒業 (ID01)

東京都中央区日本橋小網町8-2
☎ 03-5776-2435
✉ info@m-laws.jp
🌐 www.m-laws.jp



懇切丁寧に対応致します。
お気軽にお問い合わせください。

あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

皆さまの財産に関するご意思を反映する遺言書作成のご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。まずは財務コンサルタント・トラストコンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託(執行コース)手数料等について(消費税等込み)】(2025年12月1日現在)

〈お申込時〉基本手数料:330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本などの取り寄せに関する費用等が必要になります。

〈遺言書保管中〉遺言書保管料:毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬:当社所定の報酬を申し受けます(最低報酬額:1,100,000円)。上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。※契約締結後に、解約、遺言書正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。この制度により遺贈をされる場合は、遺言信託(執行コース)の基本手数料が5万円割引(税抜き)となります。ご相談の際にお申し出ください。

資料のご請求は以下までお問い合わせください。 ※資料請求以外の内容については、店舗や専門部署へお取次いたします。

0120-977-641

受付時間 平日9:00~17:00(土・日・祝日および12/31~1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託 検索



三井住友信託銀行



(上左から時計周り) シンガポール支部/北カリフォルニア支部/ID85 ± 3リユニオン/北海道支部

アラムナイハウスから

From the Alumni House

シンガポール支部活動報告

文：碓 知子 (29 ID85)

シンガポールからは毎年、シンガポール日本商工会議所 (JCCI) の奨学制度により、大学生1人が国際基督教大学 (ICU) へ1年間の留学に派遣されています。

2025年8月1日には、今年度の奨学生としてこれからICUへ留学する Clareさんと、1年間の留学を終えて帰国した Benjaminさんを囲んで、ICU交流会を開催しました。

当日は、1985年卒業の大先輩から、2023年にICU高校を卒業したばかりの現役大学生まで、幅広い世代のICU関係者14人が集まりました。ICUでの思い出話から、最新のシンガポール事情、さらには留学生活のエピソードまで、多彩な話題で会は大いに盛り上がりました。

また、2025年12月1日、ICU、ICU高校の合同同窓会を開催し、13人が集まりました。ICU卒業の佐藤敦夫さん (40 ID96) と、そのお嬢さんである佐藤優花さん (ICU高校2023年卒業) の親子参加、2日前にシンガポールに赴任したばかりのスイス人の

Berhard Escherさん (48 ID04)、シンガポール日本商工会議所の奨学生として2023-24年にICUに留学していた Sephieさんなど、年代も様々な方たちが参加してくださいました。高校の話、大学の話などいろいろと盛り上がりました。

北カリフォルニア支部活動報告

文：藤田春菜 (47 ID03)

北カリフォルニア支部では、2025年9月14日に恒例の秋のBBQ同窓会を開催しました。年2回の交流行事の一つで、秋は上智大学ベイエリア同窓会との合同開催が恒例となっています。今年も同窓生とご家族を含め約40人が参加し、サンフランシスコ湾沿いの会場で秋空の下、楽しい時間を過ごしました。幹事はホットドッグに加え、持ち寄られた肉や野菜の焼き仕事に大忙し。日本・アジア系スーパーが充実する当地ならではの、日本風焼肉や焼き芋も炭火で振る舞われ好評でした。北加支部はICU卒業生のみならずICU高校の卒業生やOYRも集う多様なコミュニティで、過去にはUCパークレー、サンタクルーズ、ディビスへの現

役ICU留学生の生活立ち上げを支援した実績もあります。シリコンバレーらしく、駐在や留学・研究で訪れる同窓生との交流も盛んです。出張や旅行で来訪される際はぜひお声がけください。今後も大学本部との連携を深め、ベイエリア在住者として支援できる機会を広げていきたいと考えています。

北海道支部活動報告

文：我孫子洋昌 (39 ID95, G2000)

去る2025年10月26日、ICU同窓会北海道支部懇親会を札幌市内の飲食店にて開催しました。当日は、大学から岩切正一郎学長、広報・社会連携部長の小瀧真利さん、同窓会事務局長の岸本誠さんにもご出席いただきました。

古賀清敬さん (20 ID76) による乾杯に続き、岩切学長からICUの成り立ち、現在の状況そして将来に向けたビジョンについてお話をいただきました。しばらくキャンパスから離れている卒業生にとってはICUの状況をアップデートできた貴重な機会となりました。

今回の懇親会は、道内各地からの参加者は13人と少し寂しいものでしたが、それでも初参加の方もいて、今年

も色々な近況報告やサークルや寮生活といった学生時代のつながりを感じる場となりました。小瀧さんからは学生募集の状況や、ICU職員として長年お勤めだった岸本さんからは思い出話もあり、懐かしくも充実したひとときとなりました。

懇親会の最後に、岩切学長から新著のプレゼントがあり、今年から北海道で社会人1年目をスタートしたばかりの権田暉平さん (69 ID25) がジャンケン大会で優勝して、サイン入りの著書を受け取りました。

2026年度も開催できるように、少し準備を早めに始めようと思っていますので、道内在住の卒業生の方で、今回の懇親会の案内をご存じなかったという方、またお知り合いの卒業生が北海道で暮らしているという方がいらっしゃいましたら、hokkaido-chapter@icualumni.comまで、ご連絡ください。

あれから40年!卒業40周年記念リユニオンを開催しました

文：奥村尚子 (29 ID85)

長かった猛暑が終わり急に肌寒くな

った土曜の午後(2025年11月8日)、アラムナイハウスで開催したID85 ± 3 リユニオンには、一時帰国中の海外組を含め80人が参加、食べて飲んで声を喧らして近況を語り合い久しぶりの再会を楽しみました。厳選したケータリング、スイーツや飲み物は大好評、じゃんけんゲームの景品にはICUワインも登場、片付けも皆で協力し、楽しい余韻に浸りつつ夕暮れ時に散会となりました。

体調不良などでやむなく欠席された方、都合がつかなかった皆様、6年後には「入学50周年」を祝う会を大学が開催し、卒業50周年の年には同窓会が主催する「桜祭り」に招待して頂けるそうです。お互い健康に気を付けてまた元気にお会いしましょう。

なお、参加費の残金31,685円は教育施設の整備(本館)募金に寄付しました。本館内に設置される顕彰板には「Class of ID 85 40th Reunion」という名称が刻まれる予定です。

同窓会ウェブサイトリニューアルのお知らせ

このたび、同窓会のウェブサイトを、より分かりやすく、見やすく、直感的なデザインにリニューアルいたしました。同窓生の皆様に向けて、イベントやニュース、支部活動、同窓生からのお知らせなど、同窓会や大学に関するさまざまな情報を、より迅速かつわかりやすくお届けしてまいります。ぜひ新しいウェブサイトへアクセスしてご覧ください。

<https://www.icualumni.com/>



同窓会オリジナルグッズに新たなアイテムが加わりました。

好評の「同窓会ポロシャツ」に新色が登場しました。深いネイビーに赤色の同窓会エンブレム刺繍が映える、上品で着やすい一着です。

また、昨年9月のホームカミングより、ICUマスコット「はちろう」グッズの販売を開始しました。同窓会スカーフを着けたはちろうぬいぐるみ、キーチェーン、ピンバッジの3種類をご用意しています。愛らしいはちろうを、この機会にぜひお求めください。



さらに、本館の改修工事の完了を記念し、本館イラスト入りTシャツも販売しています。胸元に本館のイラスト、左袖に同窓会エンブレムをあしらった、シックでおしゃれなデザインです。グッズのご購入は、ICUアラムナイショップ(<https://shop.icualumni.com/>)より承っております。配送・事務局受け取りのいずれもご利用いただけます。

皆さまのご利用を心よりお待ちしております。



寄付者御芳名 Donors

齋藤顯一 (17 ID73)
堀 元子 (18 ID74)
PINS FACTORY
貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。

たずね人 Missing

池田英人 (35 ID91)
深見淳 (43 ID99)
田中智己 (49 ID05)
金ボラム (55 ID11)
市村脩一郎 (57 ID13)
木内萌乃 (61 ID17)
野邊大樹 (61 ID17)
鳴島歳紀 (63 ID19)
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

長谷川朝雄 (1)
大塚弘毅 (2)
川崎昇 (7)
丸井秀弘 (11)
梨元 實 (17 ID73)
伊藤(旧姓:線崎)百合子 (39 ID95)
心よりお悔やみ申し上げます。

事務局からのお知らせ

★ 広告募集!

本誌では広告を募集しています。フルサイズ6万円、ハーフサイズ3万円で承っております。ご興味のある方は、3月号の掲載希望は10月までに、9月号は4月までに、詳細を事務局までお問合せください。

★ 原稿をお寄せください!

期会、リユニオンなどの案内・報告をお寄せください。本誌およびWebサイトに掲載いたします。

★ 住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際はメールまたは同窓会のWebサイトの住所変更から、ご一報ください。
icualumni.office@icu.ac.jp



地方・海外にご転勤の際には支部をご紹介いたします。同窓会事務局までお問合せください。

★ ご協力をお願いします

大学の宣伝=大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

★ 同期会やリユニオンのご相談は...

同期への連絡、学内の施設予約、ケータリング関連の情報提供など、同窓会事務局がサポートします(一部有料)。久しぶりにキャンパスで集いたいという気持ちが芽生えたら、お気軽にメールでご連絡ください。

icualumni.office@icu.ac.jp

—— DAY賞候補者をご推薦ください ——

Distinguished Alumni of the Year(DAY)賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方(卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げます。

- ※ 自薦・他薦を問いません。
- ※ 推薦は年間を通して受け付け、毎年10月15日受け付け分までを選考対象として翌3月の桜祭りで受賞者を表彰します。
- ※ 受賞者は同窓会ウェブサイトおよびアラムナイニュースで発表されます。
- ※ 推薦および選考の過程については公開されません。
- ※ 歴代の受賞者は、ウェブサイトをご覧ください。

推薦方法 いずれかの方法でご推薦ください

1) 同窓会ウェブサイト「DAY賞」のページ[推薦フォーム]をご利用ください。
<https://www.icualumni.com/activities/day/>

2) 同ページより[推薦用紙PDF]をダウンロードし、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてに郵送でお送りください。

3) メールに以下の必要事項を記載してICU同窓会事務局宛にお送りください。

- ① 推薦したい方の氏名
- ② 推薦したい方の卒業年あるいは在籍年(分かる範囲で)
- ③ 推薦理由: 新聞記事などの客観的資料があればあわせてお送りください。
- ④ あなた(推薦者)の氏名、卒業年または学生ID、住所、電話番号、メールアドレス

ICU同窓会事務局 〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2
E-mail: icualumni.office@icu.ac.jp



アラムナイニュース電子版のお申込み 同窓会メールマガジン配信先のご登録

- 1) アラムナイニュースの電子版配信をご希望の方は、下記フォームからご登録をお願いいたします。ご登録いただきますと、郵送でのお届けは行わずにメールで電子版をご案内いたします。
- 2) 2023年1月から、ICU同窓会員向けにメールマガジンによる情報発信を始めました。メールマガジンが届いていない方は、メールアドレスのご登録がないか、古いアドレスが登録されている可能性があります。ぜひこの機会に、下記フォームから最新のメールアドレスのご登録をお願いいたします。ご登録は、こちらのフォームからお願いいたします。(住所変更と共通のフォームです)
https://www.icualumni.com/to_alumni/register/



DAY賞 (Distinguished Alumni of the Year Award) 2026受賞者決定!



荻原 哲

OGIHARA, Satoshi (17 ID73)
理学科卒

荻原哲氏は大阪大学名誉教授として細胞生物学の研究・教育に長く従事し、学界において高い評価を得てきた。2012年、大学と地域をつなぐ文化の場として「ワンコイン市民コンサート」を立ち上げ、月1回のクラシック公演を豊中キャンパスの大阪大学会館講堂で継続している。学生・教職員に加え広く日本全国から聴衆が足を運び、現在では国内外の優れた演奏家が出演を希望するまでに成長した。学生団体との協働やCD制作、演奏アーカイブ公開など活動の幅を広げ、知を社会へ開く「公共性」の実践を10年以上にわたり重ねてきた。その科学と芸術を往還する姿勢は、ICUのリベラルアーツ精神を体現するものである。

Satoshi Ojihara, Professor Emeritus at Osaka University, has made longstanding contributions to the field of cell biology through his research and teaching. Alongside his academic career, he has devoted more than a decade to fostering cultural exchange between the university and the local community. In 2012, he founded the "One-Coin Concert for ALL," a monthly classical music series held at Osaka University Hall. Originally conceived for students, faculty, and staff, the series now draws audiences from all across Japan, and has grown to the point where outstanding performers from both home and abroad actively seek to appear. The initiative has expanded through collaborations with student ensembles, the publication of performance archives, and the production of several concert CDs, deepening its presence both on and off campus. By opening the university's cultural resources to the wider public, Ojihara has cultivated a shared space in which academic inquiry and artistic expression coexist. His sustained commitment to creating an inclusive cultural sphere exemplifies the values embodied in a liberal arts education and reflects ideals long upheld by International Christian University.



阿部菜穂子

ABE, Naoko (25 ID81)
社会科学科卒

1981年にICUを卒業後、毎日新聞で初の女性政治記者として首相官邸などを担当。2001年からは英国を拠点にフリージャーナリスト兼作家として日英両言語で執筆活動を続け、活躍している。2016年に出版された著書『チェリー・イングラム——日本の桜を救ったイギリス人』は、第64回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。2019年には英語版を執筆・刊行。同書は8か国語に翻訳されて多くの賞を受賞し、BBC「Book of the Week」にも選ばれた。この本は、日本で絶滅した桜を里帰りさせたイギリス人園芸家、コリングウッド・イングラムの伝記である。さらに2024年にはThe Martyr and the Red Kimonoを英語で出版。同書を自身で翻訳した日本語版『アウシュビッツの聖人を追いかけて——ある被爆者と桜守の物語』が2025年夏、刊行された。この本は、戦前に長崎で修道院を創設し、アウシュビッツで殉教したポーランド人司祭マキシミアノ・コルベ神父、長崎の被爆者、そして北海道の桜守、の三人の物語を通して、平和の大切さを訴える内容である。第二次世界大戦の記憶が薄れつつある中、「戦争を二度と起こしてはならない」という強いメッセージを伝えている。昨年、ノーベル平和賞委員会に招かれてオスロを訪問し、フリードネス委員長と面会。広島・長崎の原爆とその影響について語った。

After graduating from ICU in 1981, Naoko Abe worked as the first female political reporter for the Mainichi Shimbun, covering the prime minister's office, among others. In the UK, where she moved in 2001, she became a freelance journalist and author, writing in both English and Japanese. Her 2016 Japanese book, "Cherry Ingram, The Englishman Who Saved Japan's Blossoms", won the prestigious Nihon Essayist Club Award. She published the English adaptation in 2019. It has been translated into eight languages, winning numerous awards and being named BBC Book of the Week. The book is a biography of Collingwood Ingram, an Englishman who successfully brought back cherry trees to Japan that were thought to have become extinct. In 2024, Abe published "The Martyr and the Red Kimono" in English. She translated it into Japanese, which was published last year as "Chasing the Saint of Auschwitz: The Story of a Hibakusha and a Sakuramori". The book advocates for peace through the story of



一之瀬ちひろ

ICHINOSE, Chihiro (42 ID98)
人文科学科卒

ICU卒業後、東京大学大学院に進学。写真家として美術館やギャラリーで精力的に作品を発表している。2016年のZINE「日常と憲法」を契機に、日常における「個」と「公」の関係を探求する制作に取り組み、2019年には個展「きみのせかいをつつむひかり(あるいは国家)について」を開催。近年は、川内有緒氏の著書『ロコク・キッチン』(『群像』連載、講談社刊)の写真を担当し、本作が第35回Bunkamuraドゥマゴ文学賞を受賞した。震災から13年を経た福島の人々の暮らしを「食」を通して描いた本作は、静かながらも人間的な記録として高い評価を得ている。大学院では映像作家ジョナス・メカスを研究対象とし博士論文を執筆、上映会や講演も行っている。長年、ICU同窓会誌『アラムナイニュース』の撮影も担当し、同窓会活動にも貢献している。

Born in Musashino, Tokyo, Chihiro Ichinose is a photographer whose work explores the relationship between the personal and the public in everyday life. After graduating from ICU, she pursued graduate studies at the University of Tokyo. She has been actively exhibiting her work in museums and galleries. Her 2016 ZINE "Daily Life and the Constitution" marked a turning point in her career, followed by the 2019 solo exhibition "About the light (or a nation) around you". Most recently, Ichinose provided the photographs for "Rokko Kitchen", written by Ario Kawauchi and serialized in "Gunzo" (Kodansha), which won the 35th Prix Des Deux Magots Bunkamura in 2025. Through depictions of everyday life along Fukushima's Route 6, her work has been highly praised for capturing the quiet resilience of people rebuilding after the disaster. Ichinose also contributes to the ICU Alumni Association, serving as a long-time photographer for ALUMNI NEWS.

three people: a Polish priest, Father Maximilian Kolbe, who founded a monastery in Nagasaki before the war and was killed in Auschwitz; a Nagasaki atomic bomb survivor; and a Hokkaido cherry tree creator. The book conveys the message that war must never happen again as memories of the Second World War fade. Abe was invited to Oslo last year to talk to the chairman of the Nobel Peace Prize committee, Jørgen Frydnes, about the Hiroshima and Nagasaki atomic bombings and their aftermath.



笹島綾花

SASAJIMA, Ayaka (54 ID10)
社会科学科卒

WBSCソフトボール国際審判員。中学の部活動でソフトボールを始め、ICU在学中はソフトボール部に所属。選手として活動するかたわら公式審判員の資格を取得した。その後、審判員としてのキャリアを重ね、2017年国際審判員資格を取得。日本国内最高峰のソフトボールトップリーグで審判員をつとめる一方、アメリカなど各国で開催された国際大会に審判として派遣され、世界と日本の審判文化の違いを身をもって経験するなど、研鑽を積んだ。2021年には東京オリンピックのソフトボール競技公式審判員に日本代表審判員3人のうちの1人として出場し学生時代からの夢をかなえた。現在も卒業以来勤務している医療機関での業務を継続しながら、国際舞台で培ったコミュニケーション力も活かし世界に通用する国際審判員として日本のトップリーグでの審判員を務めている。また、所属する小金井市ソフトボール連盟では審判長を務めるなど地域活動への貢献も行っている。

WBSC (World Baseball Softball Confederation) International Softball Umpire. She began playing softball as a member of her junior high school club, and while studying at ICU, she joined the university's softball team. Alongside her activities as a player, she obtained certification as an official umpire. Building her career step by step, she later earned the qualification of international umpire in 2017. In Japan, she has served as the umpire at the nation's highest-level softball top league games. Internationally, she was dispatched to tournaments held in countries such as the United States, where she gained firsthand experience of the differences between Japanese and global umpiring cultures, further honing her skills. In 2021, she fulfilled her long-held dream by serving as one of only three Japanese representatives selected as official softball umpires for the Tokyo Olympic Games. Currently, while continuing her work at the medical institution where she has been employed since graduation, she also officiates in Japan's softball top league as an internationally recognized umpire, applying the communication skills she cultivated on the global stage. In addition, she contributes to her local community as an umpire chief of Koganei softball federation.



「fNIRS (機能的近赤外分光法) 研究の推進者」グループ受賞

檀一平太

DAN, Ippeita (37 ID93)
理学科卒

皆川泰代

MINAGAWA, Yasuyo (37 ID93)
語学科卒

佐藤大樹

SATO, Hiroki (41 ID97)
教育学科卒

3人は、機能的近赤外分光法 (fNIRS : functional Near-Infrared Spectroscopy) と呼ばれる、近赤外光を用いて脳の活動を測定する認知科学の計測手法に創成期から25年以上にわたって関わってきた。fNIRSを用いた脳科学研究の発展に大きく貢献し、3人とも国際fNIRS学会の理事 (Board of Directors) にアジア・オセアニア代表として選出されている。fNIRSは乳幼児を含む幅広い層に対して、また運動時などにも計測が可能という利点があり、認知科学や医学分野など幅広い場面で国際的に用いられている。認知科学を軸としながらも3人のアプローチはそれぞれ異なり、皆川泰代は慶應義塾大学文学部、檀一平太は中央大学理工学部、佐藤大樹は芝浦工業大学システム理工学部でそれぞれ現在教授を務め、研究にあたっている。

The three researchers, Yasuyo Minagawa, Ippeita Dan and Hiroki Sato, have been involved in functional Near-Infrared Spectroscopy (fNIRS), a cognitive neuroscience measurement technique that uses near-infrared light to measure brain activity, for over 25 years since its inception, and have made significant contributions to the development of this method and neuroscience research using it. They were also elected to the Board of Directors of the International Society for fNIRS as Asia-Oceania representatives. This method has the advantage of being able to measure a wide range of populations, including infants, and even during exercise, and is used internationally in a wide range of fields, including cognitive science and medicine. While their core research is cognitive neuroscience, the three researchers each have different approaches. Yasuyo Minagawa is currently a professor at Keio University's Faculty of Letters, Ippeita Dan at Chuo University's Faculty of Science and Technology, and Hiroki Sato at Shibaura Institute of Technology's School of Systems Engineering and Science.

3月21日
on Saturday

2026年3月21日(土)開催 桜祭りのお知らせ

今年第21回を数える同窓会「桜祭り」は、同窓会年次総会、DAY賞表彰式※、卒業50周年記念式典など、年に一度の総合イベントです。
卒業50周年記念式典では20期生をお迎えします。是非ともご参集くださいますようお願い申し上げます。

※ DAY 賞 : Distinguished Alumni of the Year Award

●開催日：2026年3月21日(土) 開始13:00(開場12:30)

●対象：全同窓会会員

●プログラム/会場：

第1部：同窓会総会、DAY賞表彰式、卒業50周年記念式典 於：大学礼拝堂

第2部：懇親会(茶会) 15:00頃を予定 於：大学食堂

●参加費：

第1部 無料

第2部 卒業生/成人：3000円、ICU在学学生：1000円、同伴中高大学生：1000円、小学生以下：無料

※20期生(ID76)及び2025年夏季ご卒業及び2026年春季&夏季ご卒業予定の皆様は、懇親会に「無料ご招待」いたします。

●要参加申し込み：ご出欠(現地参加および配信視聴)は以下の出欠フォームからお知らせください。

申し込み締切：3月11日(水)



<https://forms.gle/a3uFKDN4qWp6CR5L9>

総会の様子は同時配信されます。映像は一方通行で視聴のみになりますので、総会の議決への参加をご希望の方は委任状をご提出下さい
(下記「出欠連絡の項目」最後行を参照)。

※卒業50周年の20期生の皆様は別途お送りのご案内状からお申込みください。

※プログラムに変更が生じる可能性があります。詳細は、同窓会Webサイトをご確認ください。<https://www.icualumni.com/>



メールまたは郵送での出欠連絡の場合は以下の項目を明記してください。

*出席者氏名と Name (in alphabet) (必須)

*期/卒業年/ID 最初の2桁 (必須)

*卒業時の姓(現在と異なる場合)

*連絡先 (必須)

*総会への出欠 (必須)

*懇親会への出欠と同伴者情報 (必須)

*総会で議決権を他の会員に委任する場合、委任する会員氏名と卒業年(空欄時は会長に一任といたします)

<お問合せ>

ICU 同窓会事務局 icualumni.office@icu.ac.jp

TEL 0422-33-3320 (平日10:00~11:45、12:45~17:00)

〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2

国際基督教大学 アラムナイハウス2F

Sakura Festival on Saturday, March 21, 2026

The Alumni Association's "Sakura Festival" is a comprehensive annual event, comprising the annual General Assembly, the Distinguished Alumni of the Year Award, and a semicentennial celebration of graduation, which the class of 1976 is invited this year.

●Date & Time: March 21, 2026 (Sat) from 13:00 (Doors open at 12:30)

●Program:

Part 1: General Assembly, DAY Award ceremony, 50th Anniversary Graduation Ceremony at University Chapel

Part 2: Alumni Tea Party: at University Dining Hall, from 15:00

●Fee:

Part 1: no charge

Part 2: adult: JPY3000, university, junior/high school students: JPY1,000, elementary school students or younger: free of charge

※The class of 1976 and graduates of Summer 2025 and prospective graduates of Spring&Summer 2026 are free of charge.

Part 1 will be live-streamed. The streaming is one way and viewers are not able to vote in polls. Those who would like to make a vote should submit a proxy in advance. (See the attendance form.)

Note: Please submit the attendance form below if you are going to participate or make a proxy vote.

Due: March 11 (Wed)

<https://forms.gle/a3uFKDN4qWp6CR5L9>



※If you are class of 1976, please register from URL noted in your invitation.

※Please check the Alumni Association website for changes and details. <https://www.icualumni.com/>



Contact:
ICU Alumni Association Office icualumni.office@icu.ac.jp



STAFF

EDITOR IN CHIEF

長谷川由紀 HASEGAWA, Yuki (32 ID88)

MANAGING EDITOR

松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS

新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)
福本高宏 FUKUMOTO, Takahiro (32 ID88)
磯島 大 ISOJIMA, Hiroshi (34 ID90)
今井 順 IMAI, Jun (34 ID90)
太田順子 OOTA, Junko (35 ID91)
谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)
滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)
岡本有起 OKAMOTO, Yuki (同窓会事務局)

PHOTOGRAPHER

松島真理 MATSUSHIMA, Mari (36 ID92)

ART DIRECTOR

佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR

坂井 健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)

SECRETARY GENERAL

岸本 誠 KISHIMOTO, Makoto

PUBLISHER

廣岡敏行 HIROOKA, Toshiyuki (31 ID87)

cover photo: ICU同窓会事務局、ICUアーカイブズ提供

backcover photo: 同上

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみなさまのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか？企画、取材、執筆、撮影、編集進行等を一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいやれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

icualumni.office@icu.ac.jp

■大学・同窓会に関する情報が満載です。

ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト

<https://www.icualumni.com/>

同窓会 Facebook

<https://www.facebook.com/icualumniassociation>

同窓会 Instagram

<https://www.instagram.com/icualumniassociation/>

大学 Web サイト <https://www.icu.ac.jp/>

JICUFWeb サイト <https://www.jicuf.org/>

■ ICU 同窓会事務局

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL : 0422-33-3320

Email : aaoffice@icualumni.com

ICU ALUMNI

Vol. I No. 1

WINTER 1958

BY THE FRUITS, YE SHALL KNOW THEM

President Hachiro Yuasa

Conceived in universal brotherhood, founded by international cooperation and dedicated to the Christian and democratic way of life, International Christian University started in its adventurous career in April 1953 with a core of dedicated faculty and highly selected students, all eager to blaze a new trail for new education for the new world. Abundant blessings were offered by worldminded friends of ICU in Japan, America and elsewhere for this auspicious beginning of this University of Tomorrow.

These young men and women of the Class of 1957 were pioneers. As such, they have willingly accepted handicaps and inadequacies inevitable in an institution in its initial stage of growth. They overcame the handicaps by concerted hardwork and compensated the inadequacies with high hopes for better days to come. The epoch-making first commencement of ICU took place on March 21, 1957 and 171 graduates left the Mitaka campus to take up their respective careers, consciously or unconsciously, to test and to prove the validity and relevancy of the ICU's educational ideal of Service to God and Humanity. These first group of alumni established an enviable record of 100% employment of the widest possible range and varieties, and 100% admission for graduate studies both in Japan and America.

An equally remarkable record of initial achievement was registered by the 124 graduates of the Class of 1958. Together with the members of the Class of 1957, they have established a fine reputation for ICU and placed ICU definitely as a first rate university in the educational map of Japan.

These graduates have founded the Alumni Association of ICU. Their representative now occupies an important post as a Councillor on the ICU's Board of Councillors. All of us are naturally proud of our young alumni. They are the fruits by which ICU will be judged. So far, they have done so well, sometimes even beyond our fondest hope. Yet it is also true that it is entirely too early to predict their ultimate achievement. After all, life is a serious business, so serious that there is no room for easy optimism. And what really counts in the race of life is not the start but the finish.

It is good to learn of the publication of an Alumni Newsletter. May it serve significantly the missions of the Alumni Association: to keep on nurturing the precious fellowship born out of the common and united ideal and purpose of ICU; to encourage, support, comfort, and heal mutually in the hard struggle of life; and to grow, mature, enrich and be enriched, enlighten and be enlightened, and to become truly free as men and women in truth and in spirit.

EDITORIAL

Today is the age of dehumanization. We alumni feel its severity very keenly. The Christmas which we have kept in our hearts of joyful memories of faculty home-gathering or the candle-light service at ICU is now a far nobler dream than the daily pedestrian scene of Christmas that we see around us today; our dreams for our future have faded away before this cruel world's secularism. Of course we had heard of its hardness, but it is apt to stifle our breath by its unexpected impact. The questions of existentialism—for what purpose are we living or why do we exist—have now become realities in our daily lives. However, in the depth of a desperate situation we know the reality of the ideal on which ICU was established—International Fellowship and Christian Gospel. The newness of this ideal, which is completely lost in our age, grips our heart with a most cogent significance. It is not new in the march of time, but it is always "new" because of its real essence. It is, in fact, the only hope and salvation for modern man. The words "the university of tomorrow" have become real in this sense. To re-establish a warm human relationship in our society based on love and faithfulness and to recover the dignity of the human being in history under divine initiative is the only way of saving us from the dreadful nihilism of no purpose, no meaning, and no foundation to life's existence.

ICU Alumni have a great responsibility both to our society in which we are living and for our Alma Mater in which we were brought up. The seed has already been sown. We should expand our fellowship in this dehumanized world. The ground must be cultivated in order that the seed may sprout and bear fruit. And sometimes it might be true that unless a grain of wheat falls into the earth and dies it remains alone; but if it dies, it bears much fruit. And we are responsible not only for present situation, but we should also nurture the young institution which provides the only possibility of building a new world of tomorrow. Demons are furious in their attempts to destroy the vitality of this new bud rooted in truth. We must carefully repulse the attacks of any kind of bacilli, either internal or external, which spoil the dynamic character of life. Both are our tasks. The challenge which we met at ICU has become a reality to us through our daily experiences. We are called upon to make every effort to achieve these goals.

The kingdom of heaven is like a grain of mustard seed which a man took and sowed in his field; it is the smallest of all seeds, but when it has grown it is the greatest of shrubs and becomes a tree, so birds make nests in its branches.

Matt. 13: 31, 32.

December 20, 1958